

★☆☆ 2次元 FIGHTER GAZON

cover illustration by FCT 2D DREAM MAGAZINE

2015
08 Volume.83
1,080
[税込] yen

[カラーピンナップ]
うるし原智志
春日まゆ もみお / FCT

【えっちマンガ&4コママンガ】
堂々の最終回!

『監獄戦艦3』

楠木りん 原作・Anime LILITH
天海雪乃 じゃかうさ
からすま式 ゆたかめ
ばふえ 嘉納あいら

新連載
コラム
PCゲーム「魔法少女沙枝シリーズ」の
ディレクターが制作の秘密を大公開!

女のカラダがこんなな
に気持ちいいなんて!
ワクッ
ンは男
なの
のに

今号の
Special Fetishism Series
特集

偉人女体化

表紙&ピンナップテレホンカード応募者全員サービス

立ち読み版

- 【連載&読み切り小説】
- 新居佑 × コザ
 - 大熊狸喜 × しゅんぞう
 - 夜士郎 × 牡丹
 - 蒼井村正 × tes.me
 - 小杉信太 × 鳴滝じん
 - 酒井仁 × 雪墨
 - 千夜詠 × FCT

18
未 満

突如女体化した信長に
義元の魔の手が忍び寄る……

信長、女体化狭間の戦い

NOBUNAGA NYOTAI HAZAMA NO TATAKAI

せんやよみ
小説 千夜詠

挿絵 FCT
ILLUSTRATION



切り立った崖の上から敵本陣を見下ろし、信長は不適な笑みを浮かべた。

熱田から移動する間にも、上空のおどろおどろしい雲は厚みを増したようで、立ち込める不気味な空の中、心地好く緊張は高まっていく。

集結した織田軍は二千。対する今川の軍勢は松平隊等を先行させているとはいえず、本陣に残っているのは約六千。三倍の戦略差である。

だが、信長の自信は揺るぎなく、勝利を確信していた。

ポツリ、一粒の雨が頬を濡らした。

信長は兜の緒を閉め直し、呟く。

「天は我に味方せり」

前方を見渡せぬ激しい雨と地を叩く轟音に紛れ、織田の軍勢は今川軍本陣の間近に迫った。

雨足が弱まり、視界が広がったその時には、目と鼻の先にいた織田兵の槍先が今川兵の頬を掠める。

信長の奇襲策は見事に決まり、数の劣勢は半時も経たずして逆転。大将同士が刀を交える乱戦となった。

「お、おのれ、織田のうつけが……。だ、誰ぞ、鷹を守らぬか……」

およそ三百という騎馬親衛隊に囲まれながら退却を試みる今川義元に、織田の毛利、服部といった武将が追いすがり、そして、

「そこを退けい、今川義元、その首、叩き斬つてくれようぞ」

ぬかるんだ地を飛び、戦場を駆け抜ける駿馬に乗った悪鬼のごとき敵の総大将の姿に、義元は戦慄を覚えた。

「ヒイイっ、信長あ……っ」

馬上から信長の振るう長槍が、今川の足軽どもを蹴散らし、毛利良勝が切り開いた敵將に至る線上を

一気に駆ける。

撤退の足並みが乱れ、義元は混乱した馬から振り落とされた。

公家かぶれの男の白粉が泥に塗れ、みつともなく泣きだしそうな表情に、失禁をする。

信長が迫る。それは自らの人生の終演もまた迫っているということだ。

「義元っ、覚悟っ！」

勝った。信長は己の感じた勝利の確信に間違いがなかったことに歡喜し、全霊を込めて長槍を振りかぶる。歴史が既に歪み始めていたことに気付けるはずもなく。

ピカッ——、ズガガ——ッ！

あまりの眩しさに世界が真っ白に変わった。あまりの爆音に何も聞こえない。

信長を襲ったのは落雷。天に味方されたはずの男が裏切られた瞬間だった。

何が起ったのか、義元はしばらく理解できず茫然とへたりこんでいた。味方も敵も、その一帯にいた者は彼を除いて気絶している。

義元はゆるりと立ち上がり、まだ自分に足があることを確認すると、落雷の中心地、信長のいた場所に近付いていった。

「これ……はっ！」

倒れ込んでいるのは、つい先程自分を追い込んでいた憎き男のはずだった。だが、織田の家紋が入った兜が割れて、現れた艶やかな黒髪とうつとりとするような美麗な顔立ちを見て、義元は大声で笑った。

「くっ……ふははは……、こ、これは、何の呪いでおじやるか。ひいひっひ……」

首を討ち取り、高らかに勝利を宣言してもよかつたが、これには意味があるのだと考えた。

かつて信長を人質として取ろうとしたことがある。あの頃は端整な顔立ちの少年であり、小姓にしよう

かとも考えたのだった。

「まさか、このような形で、忘れていた欲求を思い出されるとは」

近くに倒れていた親衛隊を蹴り起こし、義元は信長であつた者を連れ去つた。

*

酷く乱暴に水を掛けられたのだろう。呻きを漏らしながら目覚めると、全身がずぶ濡れの状態であつた。

「ここは……、わしいったい……？」

記憶が飛んでいる。合戦場にて敵將今川義元を見つけ、あと一歩と迫っていたはずだった。

「御館様、捕虜めが目覚めましたぞ」

誰だつたか思い出せないが、確か今川軍の武将の一人のはずだ。そいつが御館様と呼ぶ人物といえは一人しかない。

「ご苦労でおじゃる。どれどれ、もう一度、よく顔を拝ませてもらおうかの」

でつぶりとした体格の公家のような化粧をした男は、にっと笑いお歯黒を見せてきた。

「ぬぬっ、義元」

飛び掛かろうとか、身を動かした瞬間に感じた鈍い痛み、両手が後ろ手に縛られ、座らされた状態であることに気付いた。

あれからどうしてこのような不覚を取るはめになったのか理解できなかつたが、ここが今川軍の陣地であり、捕らえられていることは分かつた。

どこまでも人を愚弄するような笑みを浮かべながら見下ろしてゆく義元を睨み付け、武人の誇りを示そうとする信長。

「命乞いなどせぬと知っておろう。さあ、この首はねるがいい」

「くっ、勇ましいこと。心の臓を射抜くがごとき眼力も、その姿では可愛いものでおじやるな」

した豊満な肉果実の上下を巻き、きつく締め付けられてしまう。

膨らみが強調されたようで、淫らな形状に歪む乳房を見せつけられると、ただ縛られているとは違う屈辱以上の恥辱を感じてしまった。

「わしが、は、恥ずかしい……だと？」

高揚していくような気分を隠し、否定し、義元を呪む。

「眉根が寄って、泣きそうな顔をしておじやるな」

「繩が、キツイだけだ。も、もう慣れたわ」

「では、これで……」

間近に寄った義元が、不意に信長の禪を掴んだ。

「ぬぐっ……、何を……する」

「禪が弛んでおったので、締め直してやろうと思っただけでおじやる。ほれ、ほれ……」

腹部側から掴まえた白い禪を上引き上げられ、股間の裂け目に布がきつく食い込んでしまう。

男の肉体であった時には、肉のワレメにどこまでも潜り込み、土手肉は露わになって、細い紐状になった脇から桃色の粘膜ビラが覗けていく。

「ふくうっ、布がわしの股座を擦って……、痛い……、痛いのだが、これは……」

ほんのりと悦の甘い痺れが肉芯から湧いてくるのを感じた。女の姿になってしまったと気付いた時とはまた別の戸惑いを覚え、ぶるぶると頭を振る。

「こ、これで……、翳っているつもりか、下衆めが」

気性の荒さが目立つ信長であるが、女性に対しては案外甘い部分があることは、史実にも垣間見えるゆえに——自身を女とは認めていないが——女性に對する義元の行いに吐き気すら覚えた。

唾を吐きかけた。

「ま、麿の顔に……。こうしてくれるわ」

遠慮なしに禪が引き上げられて、グリグリと揺さ

ぶられてしまう。

「ひぎ……っ、あっ、あっ……、そ、そこは……」

ワレメの中心にあつた肉芽が圧迫されながら、苛烈に摩擦されていった。

そこが女の弱い部分だとは妻も娶っている男の立場から知っている。だが——

「ひい……、女子のこっ……こ、これほど、敏感なのか……。この、か、感覚はああっ！」

肉芽を揺さぶられる痺れに熱さが加わり、苦痛を滲ませていた信長の表情が緩んでくる。唇が勝手に開いていつて、震えながら、口端から涎が漏れそうになってしまう。

「ほれほれ、先程までの威勢はどうしたでおじやるか？まさか、女の悦びにもう目覚めたか？」

「た、たわけたことを……、くっ、ヒイ……っ」

物理的的刺激による肉の反応は素直で、ぐちゅつと股座に奥に湿りを感じだした。それは止めることも叶わず、滲み出て、禪に濡れた染みを作ってしまう。

「も、もう……やめ……」

必死で爪先を立てるが、腰がぐねり、身悶える様相を見せてしまつて、観衆を更にニヤつかせた。

「なんといういやらしい腰つきか」

「ああ、信長があんな助平な体をした女ともつと早くに知つていれば、士氣も上がったことだろう」

「た、堪んねえ……、あれが御館様なら、さぞ、信長軍の武将も悶々としていたんじゃねえか」

好き勝手に嘸き始める今川の武士らの声を聞いて、信長はギリツと唇を噛むが、

「んほ——っ！ さ、触るなっ……、いヒ——っ！」

禪に浮き上がった信長の肉芽は、義元のもう一方の手で、摘み上げられてしまう。

「コリコリに勃つておるわ。むむ、まだ皮被りでおじやるか……、では……」

禪の上から、器用に肉芽の包皮が捲られてしまい、

一層に鋭敏になつたそれへ武骨な指が猛烈に擦り付けてきた。

「や、やめんか……、おっ……おおおお——っ、なんじゃこれはあ……、わしのっ、体ああっ！」

刺激が電流となつて脳髓に駆け上がり、背を仰げ反らせながら喘ぎを見せる。

牛のような巨乳を振り上げ、汗を飛び散らせながらぶるぶると揺らしまくり、これが性の悦楽と気付ぬうちに、脳が快感にいかれる。

鮮烈な初めての女の性感に、無様に自律神経が麻痺してしまい、

「っん……ハア——っ、やめっ、やめえええっ！」

プシャ——っ！ 失禁——力が全身から抜けてしまい、陸に上がった鯉のように、ぱくぱくと開いた唇から涎を漏らし続けた。

「くく、ふははは……。よい様、よい様でおじやるさあ、もつと愉しませておくれよ、信長」

義元が手を離れた瞬間、信長はどざつと地に倒れ込む。

乱れた呼吸、乱れた思考。握り締めた拳だけが、何かに抗おうとする意志を示しているようだった。

舌を噛み切ろうかとも思つたが、考えを改めたのは、四つん這いに敷かれた時だ。

まだ裸のまま、足軽に泥のついた鞋で顔を踏まれ、尻を高く突き上げさせられながら、怒りの中に、ふと冷静になつた瞬間に気付いた。

織田軍が破れたのなら、今川軍がこの陣地に留まつている理由がない。ならば戦況は一旦膠着しているというところ。味方は自分が行方不明と思ひ必死で探していることだろう。そして今川軍は、自分を捕らえたことでもう勝つた気ではいるはずだ。

——こは、甘んじて屈辱を呑み込み、機会を窺うか。義元の首は目の前なのだ。

禪一つでも相手の首を絞めることはできる。そんな計略を思い描いていると、その布切れ一枚の尻に義元が近付いた。

「さあ、そろそろ、信長殿が女子となった明確な証を確かめさせて頂くでおじやる」

「ふん、好きにせい。つくづく趣味の悪い輩よの」

「いやはや、吠える姿もこうなつては可愛いものでおじやる。どれ」

けつの穴まで晒されようと、男に見られて何を思うことがあろうか。

だが、義元の指先が禪に掛かり、取り囲んでいる男達のいやらしい笑みを視界に捉えると、鼓動が高鳴り、呼吸が乱れてきてしまう。

「ど、どいつもこいつも、わしを女子として見ておるのか。そんな目で見るでない。ひゃ……っ！

禪の紐が解かれ、気持ちを引き締めていた物も同時に緩んでいくようだった。

ハラリと小水で湿っていた布切れが落ちて、糸纏わぬ姿になった途端、ぎゅっつと瞳を閉じる信長。

「ほほ、これはア、何とも卑猥なオチョコでおじやるな。くく……」

オチョコとは駿河や遠江の言葉で女性器を意味するが、信長の正妻である濃姫の故郷である美濃でも同じ呼び方をしていた。

何を言われているか直ぐに理解し、擲擲されたことに關して、怒りよりも恥ずかしさが先に立つ。

「お、お……、アソコが熱い……。物凄く、み、見られておるうっ」

焼つけくような視線が、弄くり回されているかのように感じ、ふるふるとお尻の柔肉を揺らしてしま

う。「おぼこのような薄いピラをしておるのに、ヌラヌラと濡れておじやる。下の毛が張り付いて、蒸れた匂いをぶんぶんさせて……、ああ、はしたない」

「愚弄するのもいい加減に、ヒ……ッ！」
涎を垂らしそうな表情で、義元がお尻を撫で回してきた。背筋に悪寒が走りながら、だが同時に尻肉に性感が染みてきてしまう。

「形は女子以上に牝でおじやる。機能はどれ？」

配下の下級武士から何かを受け取り、義元は、それに一度舌を這わせた。

「うむ、なかなかの味でおじやる。信長殿にも食わせてしんぜよう」

顔を踏みつけられたまま、かろうじて視線を送ると、義元の手に握られていたのは、男根の形状に加工された山芋だった。

「は、腹など空いておらぬ」
忌まわしい予感しかせず、暴れる信長だったが、女の体になった今、以前のような力は出ず、義元の手でがっしりと腰が固定されてしまう。

「遠慮めさるな。ほれ、たんと食え」
ぐぶ……っ、肉が開かれる初めての感覚。女と化した股座に硬い山芋が当てられ、信長の表情は強張った。

「や、やめ……」
義元は鼻腔を広げ、息も荒々しく、その興奮の強さのまま、ズブ——ッ！ 一気に肉壺を押し広げて異物を振じ込んできた。

「ぐっ、くううう……、お、おのれ、おのれ、おのれえ——っ」

童貞でなかったせいも、処女膜はなかったが、繊細な粘膜を抉じ開けられ、肉体の内側への蹂躞感がきつい。山芋は、とろろ汁を纏い、その滑りで女性化した最奥まで、グリグリと突き込まれてしまう。

「どうやら、ちゃんと女の機能が備わっておるようでおじやるな。ぐふふ、堪らんのお」

血走った義元の瞳に、膣口を捲られて山芋をくわえこんでいる様子を見られている。恥辱にみつとも

なく喘ぎそうになるのを忍び、恨めしく敵将を睨みながらも、女が満たされる未知の感覚に、涎のように淫蜜を滴らせ始めていた。

余程追い詰められた時を根に持っているのか、義元は信長の心を揺さぶり弄んでくる。

「ほ、本当に、勝負に勝てば、わしを解放するといふのだな」

ぼろぼろにされた着物と甲冑が返され、刀と脇差しも戻される。

何の気紛れかと訝しげに思ったが、義元が提案したのが、彼の指定した武士との一對一の真剣勝負に勝てば自由を約束するというものだった。

「なに、余興でおじやる」
嫌味に笑う義元に胸はムカムカとしたが、隙をついて奴の首を取る良い機会と考えた。

何十人も敵兵に囲まれた場所待つと、義元が信長の相手に指名したのは、農民から駆り出されたような雑兵だった。

「ば、馬鹿にしておるのか！」
「滅相もないでおじやる。正確に今の信長殿に見あった相手を見続つただけのこと」

「女子の体になろうと、わ、わしの技量は……、ぬっ、うう……」

腰がぐねりだしてしまふ。実はまだ肉壺に山芋が入り込んだままなのだ。抜かれる瞬間、無意識に膣が締め付けて、ポキッと折れてしまった。取り出せないまま、一塊が残ってしまった。

勝負の緊張にしばし忘れていた異物感が、山芋から滲み出る汁の痒みを伴って、牝の粘膜を苛んでくる。一度意識してしまふと、一層痒みは膨張して感じられ、何とかして鎮めたくなり、お尻を振ってしまふのだ。

「も、もう、よいわ。は、早く、勝負をいたせ」

彼女には絶対見せられない
闇オークションで散らす
もう一つの処女！

姫騎士会長アイラ

背徳の
接待快楽

第二話 闇の淫行オークション
刻まれる肛虐快楽

あらいゆう

小説
NOVEL

新居佑

挿絵
ILLUSTRATION

コザ

登場人物紹介



蘇芳アイラ

聖アザリア学園の生徒会長。国内でも数人のS級魔法騎士資格保持者でみんなから慕われている。

春日巧

魔法の授業が苦手でお世辞にも強いとはいえないアイラの彼氏。純粋で優しく愛らしいルックス。

小寺仁三

国内でも有名な政治家。魔法騎士を育成する学園を買って、自分の利権のために利用している。

前号までの
あらすじ

初めての彼氏と順風満帆な学園生活を送っていたアイラ。しかし両親が彼女に残した聖アザリア学園は多額の借金を抱えており存続が危ぶまれていた。そこに目をつけた未来党幹事長・小寺はアイラの身体を襲い、ある提案を持ちかけた。

「あつ、アイラ……っ」
「た、巧……っ」
時刻はちょうど放課後。授業が終わったアイラが、聖アザリア学園の廊下を一人歩いていると、こちらもちょうど向かいの通路を歩いていた魔法騎士科の一年生、春日巧と目が合ってしまった。
巧は周りに誰もいないことを確かめると、その少し幼さの残る顔に柔らかい笑みを作り、アイラを会長や先輩でなく、親しみを込めた下の名前で呼ぶと、うれしそうに近づいてきた。
「ど、どうしたの巧？ 今は中間試験期間のはずよ。早く寮に帰って勉強しないと……。S級騎士になるどころか、落第してしまうわよ？」
しかしアイラは、巧とは反対に、その透き通った碧眼を俯かせ、どこかよそよそしい言葉を口にしてしまう。
生徒会長室で、恋人の巧の若々しいペニスを、初めてのフェラチオで気持ちよくした日から、おおよそ一カ月。春から初夏に移り行く季節の中、アイラは意識的に、巧との距離を取るようになっていた。
「え？ ……うん、うん。そうだね。ごめん、僕が浮かれてたよ。アイラは、僕が立派な魔法騎士になる

ことを、応援してくれてるだけなんだよね。アイラだって、この一カ月はずっと生徒会や騎士の仕事で忙しいみたいだし。それに……」
言った巧は、長身のアイラの美貌に手を伸ばし、そつと額に手のひらを当ててみせた。
「な、なにを……巧!？」
「やっぱり。アイラ、ちよつと熱があるんじゃない？ 最近どこか顔が赤いから、気になってたんだ。半人前の僕が言える立場じゃないけど、アイラにはいつも元気できてほしいから」
「……………っ」
奥手だが、ちゃんと自分のことを見てくれている、その優しさにアイラの胸が幸せでキュウツと、きつく締めつけられる。
アイラも実は最近知ったのだが、巧は意外とモチるらしい。ルックスは愛らしいほうで母性をくすぐるタイプだし、この優しい仕草や気遣いが女子の間でも結構人気なのだという。今はまだだが、将来二人の仲を公表するときにくれば、素敵で幸せなカップルとして、誰からも祝福されるはず――。
と同時に幸福とは真逆の感覚――痛烈な背徳感に、制服のミニスカートの下に隠れた、清らかな女の園が、妖しく熱い疼きを覚えてしまう。
「あ、ありがとう巧。でも私は大丈夫よ。う、く……だから、あなたは早く帰りなさい。大丈夫よ。私のはこんなことで根を上げたりしないから、ね？」
巧に指摘された頬の桃色が、股間を走る甘い感覚につられるように、濃い朱色に染まっていくのがわかる。
アイラは意識せずとも変わっていく自分を、これ以上、巧に見られたくないと強く思い、今でさうる限りの笑顔を見せて、大切な彼氏を安心させようとした。
「……………うん、そうだね。アイラは強いもんね。でも、

無理しないでね。僕はアイラの彼氏なんだから、いつでも頼ってね、アイラ」
そう微笑みながら、巧は一人学生寮のほうへと駆けて行った。
だが純粋無垢な、愛らしい後輩は知らない。
巧の後ろ姿が完全に視界から消えるのを確認すると、アイラはグツグツと熱く煮えたぎる股の間の秘穴を、スカートの上からきつく押さえ、凛とした生徒会長とは思えない甘い吐息を漏らしながら、近くの壁にその身を預けた。
「はあ、あうっ……くんっつっ!」
頬を真っ赤に染め、切なそうに顔を伏せながら、震える唇を噛む。
むちりとした左右の太腿を、純白のショーツごといやらしく擦り合わせて、そこから生まれるズキズキとした、明確な牝の快感の脈動に、ブルブルと身体を震わせてしまう。
一カ月前のあの日から、子宮に挿入された淫蟲が吐き出し続ける強力な媚毒によって、アイラの麗しい女体は、常時発情中の牝犬も同然なほど、快楽を求め、疼いてしまうよう、改造、調教されつつあった。
（こ、こんなこと巧に知られちゃいけないわ。この学園は、巧の夢は……私が一人で絶対に守ってみせ………んんんっつっ!）
プチュウツッ! 不意に女芯で放たれた濃い媚毒官能の淫撃に、切れ長の瞳をきゅつと閉じて、唇をきつく噛み締めてしまう。
そう、巧は知らない。決して知られてはならない。愛する初めての彼女――凛々しい先輩であり、騎士としての目標のアイラが、学園と彼自身を愛するがゆえに、下劣な悪党の姦計にハマり、一カ月の間、人知れず、心も身体も醜い男から、子宮への直出しを含む、淫らな肉体調教を受けていたことを。

(アソコが熱い……。ショーツが朝からずつと濡れて……。許して巧。でも私、ま、負けないわ……)。

そう強がるアイラのスカートに収められたスマートフォンが、不穏なバイブレーションをおこす。不躰に送られてきたメールを確認し、アイラの美貌が険しくなる。

(い、今からですって……っ?! と、とうとうこのときがきてしまったのね……)

はあっ……と、憂鬱なため息をひとつ漏らしたあと、アイラは決意を固めるかのように、いつもの凛とした表情を作り、人知れず学園の裏門から、外へ出る。

そう。これくらいの快感や恥辱に屈してはいられない。一カ月に及ぶ官能の下ごしらえが済んだ今日この日から、アイラは五十億もの負債を抱えた学園をたった数カ月で救済するために、自らの身体を売って、お金を稼がなくてはならないのだ。

学園で巧と別れてから、五時間後――。

アイラが今いるのは、数十年前、日本が高度経済成長まったただ中であつた頃、建築された、洋式の迎賓館だ。

都内とは思えない広大な敷地に、日が落ちてなお美しい白い壁面で覆われた、バロック調の巨大な館が雄雄しく建っている。

つい十年ほど前までは、数々の要人を迎えていた迎賓館も、今ではその役目を終え、日本の最大野党・未来党の党首である小寺仁三個人の所有物として、夜な夜な豪華なパーティが開かれている。

『おとおっっ!!』

アイラがその美しい姿をゲストたちの前に現すと、ホール中から大きな歓声が上がった。しかしそれが自分を賞賛する、好意的なものではないことは、ア

イラ自身、痛いほどわかっていた。

(くっ、これが……小寺が主催する「闇のパーティ」……なの?)

それはアイラが魔法騎士仲間の中で、噂程度に聞いている淫らな宴の異名だった。

ホールは全体的に薄暗く、妖しい雰囲気を出し出すスポットライトが、アイラを照らす。

ホールに現れたアイラの視線の先には、スーツ姿の若者から老人までが、妖しいデザインのマスクをつけて、こちらをニヤニヤと見つめている。

男たちはみな仁三と同様、日本のVIPでありながら、悪に手を染めた人々に他ならない。そしてこの迎賓館は、調教した女性たちを高値で取引する、淫らな裏オークションの会場というわけだ。

ここに商品として売りに出された女たちを、集まったゲストたちがオークション形式で、一晩だけ購入し、犯す。買われた女たちは、法外な大金と引き換えに、文字通りゲストたちの欲望の捌け口にされるのだ。

もし噂が本当なら、S級魔法騎士の誇りにかけて、必ず取り押さえてやろうと思っていた現場に、まさか自分が『牝の商品』として、こんな下衆な連中の競りにかけられるなんて、つい一カ月前までは、微塵も思いもしなかったことだった。

『お、お集まりのゲスト様……。くっ、商品番号3番……す、蘇芳アイラで、ございます……。ど、どうか。今夜は卑しいめ、牝である私を、高値で買い取ってくださいませ……っ』

控室で仁三に教えられた自己紹介を、たまらない恥辱にまみれながら、アイラは喉の奥から搾り出すように口にした。

そして淫猥にライトアップされたその姿は、普段の凛々しい制服姿ではなく、仁三が用意した極小のピキニの着用を強制された、とても誇り高い騎士会

長とは思えないものだった。

水着はライトに妖しく映える艶やかな黒。しかもアイラの瑞々しい若肌を覆う面積は、限りなくわずかなものでしかなく、胸の部分はわずかでもずれば、穢れないピンク色の乳輪が、男たちの前に露わになってしまいうだろう。

股間部分はさらに小さく、クロッチはアイラの尻のワレメにきつく食い込み、仁三によつてキレイに剃られた屈辱のバイパン姿を晒してしまふ。

どう見ても露出好きの痴女にしか見えない水着姿にあつて、少女の首元には聖アザリア学園のネクタイが背德的に締められている。

さらには自身が本物の魔法騎士――蘇芳アイラであることを示す生徒手帳とS級魔法騎士の身分証明書の顔写真部分を開いて、男たちに確認してもらおう屈辱まで味わわされる。

(くっ、あうっ……見ないで。こんな姿……あつ) によりアイラの心を辱めているのは、臍の部分に刻まれた黒い蝶の紋様だ。それは闇魔法の系統において、『発情』を意味する呪いの印である。

幻惑のワルキューレの二つ名で、マフィアや悪徳政治家からも恐れられる魔法騎士の身体が、すでに快楽に侵されている事実を、こんな下衆な男たちに知られたくはなかつた。

『すごいつ。本当に、あの『幻惑のワルキューレ』が牝オークションの商品にっ!』
「公国の血筋を引いた魔法騎士がなあ。小寺様も意地の悪いことを考えなさる」

数少ないS級魔法騎士であり、眉目秀麗。さらには王族の血族であるアイラのこと、政財界にも広く知れ渡っていた。

そして彼らはみな、すでに仁三に、アイラの事情を聞かされているのだろう。
魔法騎士という、正義の立場にあるアイラが、金

策に悩み、あろうことか悪人たちに向けて「自分を
買ってほしい」と口にしたことに、歪んだ心を持つ
ゲストたちの唇が卑猥な笑みを形作る。

「くっ、お金のためとはいっても、こんな連中に……
（っ）」

アイラは感じたこともない圧倒的屈辱と不条理に
歯を食いしばり、なにもできない自分の現状を嘆く。
政財界のVIPが揃うだけあって、ホールには十
人をゆうに超えるSPたちが銃を懐に備えている。

しかし彼らがいくら手練れでも、S級魔法騎士で
あるアイラが本気を出せば、この場をたつた一人で
制圧し、仁三以下の連中を捕えることは可能だろう。

だがその後の学園、そこに通う生徒たちはどうな
るのか。仁三を逮捕しても、債務がなくなるわけ
はない。借金を返し終らない限り、また別の悪党の
魔の手が、聖アザリア学園に伸びてくるだけだ。

不意に、ホールの照明が一段暗くされ、心を淫靡
に昂らせるメロディとともに、ステンレス製の鈍い
銀色を放つ一本のポールが、水着姿のアイラの目の
前に持ち運ばれ、しつかりと床と天井に固定される。

ゲストたちが、待ってましたと言わんばかりの歓
声と拍手を送り、薄暗くなった部屋の中、眩しいラ
イトがポールの傍に立つアイラを淫らに照らし出す。
「さあ、教えたとおりに踊ってみせろ。この連中
はお前から見れば、ワシと同じ下衆の極みなのだろ
うが、みな札束をゴミのように扱える金持ちどもで
もある。気に入られれば、相当な額が稼げるぞ、よ
かったなあ、アイラ」

ゲストたちと同じマスクをつけた仁三が、頬を紅
く染めているアイラの耳元で囁く。同時に、小瓶に
入った透明な媚薬入りローションを、淫猥な水着姿
のアイラの身体の隅々にまで、その醜い皺の入った
両の手のひらで塗り込んでくる。

「ま、また媚薬を……あ、ふんっ……ああっ。く、
ふううっ！」

汗だけでなく、塗り込められたローションによつ
て、抜群のスタイルを持つアイラの女体が無理やり
興奮させられ、一層淫らなテカリを帯びていく。

こんなことを仕向けた醜い男に対する怒りが湧い
たが、もう逃げることはできない。

「わ、わかつているわ……。学園を……巧の夢を守
るためなんだから……こんな連中に買われるくらい
……（っ）」

守るべき大切な人を想い浮かべ、アイラは覚悟を
決めると、黒いマイクロビキニを身に着けたまま
目の前に備えつけられた銀色のポールへと、緊張と
羞恥でわずかに震える手のひらをかける。

そのまま右足を、できるだけ艶めかしくゲストの
目に映るように、ゆつくりと百二十度の高さまで上
げていき、むっちりとした太腿を妖しく見せつけな
がら、直径五センチほどのポールに右足を絡みつけ
ていく。

同時に、極小ビキニによつてかろうじて隠されて
いる、魔法騎士の魅惑の陰部をクイッとゲストたち
に突き出して、普段クールな美貌に、慣れない愛想
笑いを浮かべてみせた。

「私、S級魔法騎士の蘇芳アイラは、ゲスト様のお
眼鏡にかなうよう、精いっぱい、み……淫らな牝淑
女ダンスを披露させていただきます……（っ）」

恥辱の言葉をお口にしながら、アイラは恥ずかし
さと悔しさで、心が弾け飛んでしまいそうだった。
決して本心から言っているわけではない。けれど
自分を高く売らなければ、曾祖父の代より続く、聖
アザリア学園は、性根の腐った仁三のものとなり、
騎士とは名ばかりの悪党たちを育てる機関になつて
しまう。

そしてそれは、愛する巧の「立派な魔法騎士にな
り、人々の役に立ちたい」という、純粋な夢をも壊
してしまうことになるのだ。

高潔で知られるアイラの、見るからに悔しげな表
情と仕草に、ゲストたちは、静かな嘲笑を漏らし、
ポールに片足をかけ、大腿を開いた水着姿の女騎士
を見つめる。

ゆうに百を超えるその視線の一つ一つが、アイラ
のプライドを傷つけ、同時に蔑まれることへの異様
な感覚を、全身から湧き出る汗のように、本人の知
らぬ間に、ゆつくりと肉体へ刻み込んでいく。

「くうっ、こんな連中に見られ……ああっ、お願い
もつと見て……（っ）」

乙女としての本音と、お金を工面するために、使
命やプライドをかなぐり捨ててまで、媚を売らなけ
ればならない現実には苦悩しながら、アイラは一流の
騎士として鍛えられた肉体を存分に駆使して、ゲス
トたちに恥辱のポールドダンスを見せつけるべく、う
ら若き女体で淫靡な舞を踊り始めた。

「んっ、はあ……っ。ふくっ、んんっ！」
甘く深い吐息は、半分わざとで、半分本気だ。媚
薬ローションで昂らされた身体は、ただ立っている
だけで、全身を愛撫されているかのような、キユン
ツとくる甘つたるい感覚をもたらしてくる。

その中のポールドダンスは、さながら変態的なオ
ナニーを見られているような、倒錯的な快感を覚え
込まされてしまう。

片足をポールに絡めたまま、右手でポールを持つ
と、鍛えた若い筋肉と、その上にほどよくのつた女
の柔らかい脂肪を、きゅっ引き締め縮める。

数日前、仁三に見せられた映像の中のストリッパ
ーと同じように、自らの身体を宙に浮かせ、握った
ポールを支点に、そのままゆつくりと一回、二回、三
回くるりと回つてみせる。
「はあうっ！ くふ、あ……ふうっ」
そのまま地面にお尻をつけ、大きく両足を百八十

度開脚すると、床にお尻をつけた衝撃が、甘美な発情電撃となつて、アイラの子宮を直接燃え上がらせる。

同時に、水着によつて露わになつた、太腿の筋肉の収縮による、乙女騎士の健康的なエロティックさが、ゲストたちの視神経を伝ひ、脳内に潜む野性の牡欲を強く刺激する。

「じめるっ」という、男たちの生々しい舌舐めずりの音を聞き、アイラは媚薬による官能にビクビクと身体を震わせながらも、開脚したまま器用に立ち上がり、背後に置いたポールを自らのお尻のワレメで、思い切りぐいっと挟み込む。

「んふうっ！ あうっ、ふう〜っ」

ポールを極小水着のクロッチに押し込み、両サイドから尻肉がムニユリといやらしくはみ出る様は、まるでいきり立つペニスを啜え込む、淫らな妖華だ。しかも敏感な股間近くを刺激することで、媚薬ローションの効き目が格段に増してしまい、思わず出そうになつた甲高い牝の声を、歯を食いしばつて抑え込む。

（こ、こんなこと……。全部あの男に見せられたことなのよ……。っ。私が考えてやつてるわけじゃ……。んはあうっ！）

アイラも今の自分が、あきれるほどエロティックな嗜好品であることは重々承知していた。

だからこそ、たまらない恥ずかしさに堪えながら、男たちの気分を昂らせるために、掲げた両手でポールを握ると、お尻をゲストに向けたまま、水着に隠れた不浄の穴を、冷たいステンレスの円柱にギチュリと押し当てる。

握つたポールを艶めかしくたぐり、膝をガニ股に押し曲げながら、突き出したヒップを、ポールに擦りつけ、いやらしく上下動かさせる。

「はあ、ああ、あうっ……。んあうっ！」

（あふっ、か、感じる……。っ。こんないやらしい格好で、子宮が疼くなんてっ。くふっ、んんっ！）
アイラがゲストたちに媚びようとするほどの、尻の間にも塗りつけられた媚薬ローションと、無機質なポールがこすれ合い、ニチャニチャという、いやらしい水音が、ホールに流れる官能的な音楽に混ざり合う。

ポールによるお尻への刺激には、鋼の理性でも抗えず、知らぬ間に、きりりとした肩が、とろんと垂れ下がつてきて、より大きく上下する魅力的なヒップに合わせ、誇り高き姫騎士会長の、牝の発情声が、下賤なゲストたちの耳にも届いてしまう。

「ほはおおつ、いい身体だな。尻もあんなにうまそうな脂がのつて。こんな上玉はめつたに出回らんよおし、私は十万出そう！」
「では僕は十五万だ。音に聞くワルキューレが、こんなにふしだらな女だつたとはねえ。今日はいい買い物ができそうだ」

羞恥に焦がれるアイラの純な心とは裏腹に、市井の女とは比べ物にならないほど上等な、アイラのボディスタイルとステータスに、財布の紐と己の汚れた野生の枷を緩め始めた。

主催者である仁三が合図を取る中、小刻みに値段が吊り上り、誇り高い姫騎士に、牝の価格が刻まれていく。

「よ、よるこんでいただけで光栄です。あふっ、もつと……。もつと近くでアイラの変態ダンスをご覧くださいっ」

（女を遊び半分で貶めるなんて……。こんなこと絶対に許されないわっ！ あはっ、んあうっ）

何者にも屈せず、ただ人々のために尽くす——幼い頃から魔法騎士の固い信念で形作られてきたアイラにとつて、誰とも知れない男たちに、ゲーム感覚で自分を値踏みされるのは、どうしようもない屈辱

だった。

しかし今は、耐えるしかない。エロティックなりズムにのりながら、腰をくねらせ、尻だけでなく、ポールを胸に突き込んで、量感たっぷりの疑似パイズリを披露する。

余計感じてしまうことを承知で、無機質な銀色の柱にネットリとついた、自らの媚薬ローションを、目を細め、れろおつと舐めとり、くちゅくちゅと口の中で咀嚼し呑みこんでみせる。

ゲストが胸や尻などのセクシースポットに目がいっているのと悟ると、ポールを軸に、テカる身体を回転させ、アクロバティックかつエロティックなポーズで、焦らし悩ませる。

それは基本こそ仁三に仕込まれたものだったが、もはやアイラ自らが、内から迸る無意識の牝衝動に任せて行っているものだ。

（ああ、私、自分の意志でこんな真似を……。っ。へ、変な気分になつて……。私、私でなくなつていくみたい……。っ）
すべては自らの商品価値を引き上げ、より多くのお金を男たちから引き出すため——。

そう頭ではわかつていても、気づけば、ポールを逆手に握り、頭を下にしたまま、空中で大開脚を披露してしまう自分がいる。

巧にもまだ見たことのない、破廉恥極まる水着の下に隠れる、媚薬により欲情した牝の肉唇の淫猥な二枚貝の形が、ライトにはつきりと照らされ、男たちの脳裏に刻み込まれ、穢されていく。
立派な騎士であるために鍛えてきた身体能力を、こんな破廉恥なことに使わなくてはならないのが、歯がゆくてたまらない。

「いいねえ、アイラくん。しかしただダンスを見せているだけでは、残念。これ以上値はつけれないなあ、くく」

必死に自らを売り込もうと、淫靡なダンスを踊るアイラに、マスクをつけた男たちが、汚い笑みを浮かべてにじり寄ってきた。

その手のひらは、いやらしくワシワシと動き、スーツの股間は、目を背けたくなるくらい、厚い布地を押し上げた、淫靡なテントを張っている。

(なっ、ポールドダンスだけじゃなく……直接身体まで?! で、でも今の金額じゃ全然足りない……!)

思わず男たちの手を払いのけようとしてしまったが、現在提示されている金額では、あと数カ月続いても、莫大な借金の利子にさえ払えないだろう。それでは学園は、仁三の手に堕ちてしまう。

チラリと仁三を見ると、こちらも唇の端を上げて笑っている。その笑みは、『なんのために、この一カ月調教してやったと思っているんだ』と、はつきり示されていた。

「う、く……っ。わ、わかりました。ゲスト様の気の済むまで、アイラのすべてをチェックしてください……っ」

言って、アイラは淫靡なポールドダンスを続けながら、本来、愛する巧だけのものである、その成熟したグラマラスな女体——、その秘めた部分までも、飢えたゲストたちに開放した。

「うほほっ、写真で見ると触るのでは大違いだった。この太腿の柔らかいことっ」

「よく育ってるねエ。おっぱいなんて、まるで採りたてのスイカみたいだよ」

「あっ、はううっ。あ、ありがとうございま……んひうっ! あっ、そ……そこは……く、ふううっ!」

ポールに両手足を巻きつけたままのアイラの女体に、男たちの歪んだ劣情が殺到する。しかもこのパーティーの出席者たちは、みな仁三に勝るとも劣らない、女の牝を発火させるテクニクと、それを楽しむヘビのようなしつこさを兼ね備えていた。

媚毒で敏感になりすぎて美肌を、誰のものともわからない手のひらが、ねっとり人念に撫でまわしてくる。

黒いビキニに包まれた爆乳を、下から掬い上げられるように刺激され、弾力ある牝脂肪を荒々しく扱われるかと思えば、美しいお椀型の胸の外縁を指先で、何度も何度も、ただつうーとなぞることしかしてこない。

太腿に執着する男は、あえて片足を九十度まで開脚させ、その張りつめた筋肉の繊維へ、化粧筆でなぞるように、さわさわと緩やかな愛撫を施してくる。
 (な、なんなのこの人たち……?!? こんな、中途半端な……あうっ。でも昂るっ。感じてしまうなんて……えっ! はあはあ……巧いっ)

思わず愛する彼氏の名前を呼んでしまい、自分の身体と心を弄ばれている感覚に、屈しそうになる。

しかし一度勢いを緩めていたアイラの値段は、再び上昇ラインを描きだし、ビキニを結ぶ紐の間には、お礼と嘲りの意味を込めた札束が、グイグイと差しこまれていく。

(お、お金が……っ。私と巧の夢を守るお金が……こんなことで増えて……くうっ)

皆に規範を示す生徒会長でありながら、身体を売っている事実が悔しくてたまらない。

けれどアイラが恥を晒せば晒すほど、腰の札束は増えていく非情な現実には、誠実を責ぶ心が押しつぶされそうになる。

「ふふ、いい具合じゃないか。だがまだ目標には足らんだろう? さあ、アイラ。あとはどうすればいいか、聡明なお前ならわかるなあ?」

「あ、あふ……ま、まさかこれ以上のことを……?!? ふざけないでっ。わ、私は……っ」

『誇り高い魔法騎士です!』とつさにそう強く言い返そうとしたが、極小ビキニ姿の自分に向けて、

ブワツとばら撒かれ、床に広がる札束を見て、置かれている状況を再認識させられる。

処女を奪われ、調教され、媚薬まみれの発情女体。あげく男たちの見世物に——。しかし、そうしなれば守れない大切な場所が、大好きな人がいる。

「くう……。わ、わかつてるわ。全部学園のため。お金を稼ぐのが、生徒会長である私の務め……っ」

決して仁三の思惑に屈するわけではない。が、学園の生徒会長として、愛する後輩の恋人として、卑しい牝になりきるしかない。

(や、やるわ……。今の私は騎士でも会長でもない。ただの牝、商品なのよ……っ。恥ずかしいことを売り物にした、卑しい変態女あ……っ!)

それまで恥辱に揺れていたアイラの美貌に、うつすらと妖しい光が宿る。それは彼女が映像で見た、ストリップパーたちと同じ、艶やかな牝のものだった。

凛々しき生徒会長は、限界ギリギリまで火照りきった身体に鞭を入れ、右手でポールをきつく握る。

そして自ら大きなガニ股姿勢をとると、腰をグイッと突出し、媚薬ローションがたつぷり塗り込められた円柱に、強制欲情させられた陰唇をグチュリッ

ッ! と思い切り押しつけた。

瞬間、膨れ上がった牝の華芯から、落雷のような快楽の閃光が輝き、アイラの頬がクンツと色つぼく、天井に向けて跳ね上がる。

「んあうっ! んふ……っ、み、皆さま……これより変態女騎士のポールオナニーをご披露いたします。ゲスト様の善意あるご入札、ああ、心よりお待ちしております……い、いきますっ!」

そう言うと、アイラの腰がカクカクッ! と扇情的な上下動を始め、ぶにぶにと柔らかい牝の肉芯がポールに食いついたまま、激しく擦り上げられる。

「ほっほおっ! こいつはすこいっ。S級騎士のオナニーとは眼福ですなあ、ならば一晩百万だっ!」

「あ、ありがとうございますっ！ んひっ！ あっ、ああ……ど、どうですか!? 名門、蘇芳家の一人娘、アイラの発情マスコ、あの方に落札されてもいいのですかっ!?」

そう挑発的な言葉を発し、さらに腰を激しく上下させていく。

残った左手でクロッチを引つ張り上げると、ゲンツ! と限界まで股間に食い込んだピキニの両端から、充血しきった女肉がぐにいとみ出てしまう。その淫唇は、すでに仁三によって恥毛が一本残らず処理されており、男たちの欲望と想像を駆り立てる。

同時に、アイラは格式高い『蘇芳』の名を口にしてまで、自分の価値を引き上げようとする。

（お父様、お母様、家名を汚して申し訳ございません。買ってくださいませんか!? ……みんなが私を高く許してください!）

亡き父母に託びながら、アイラはさらに腰を前に突出し、充血しきった淫らな二枚貝で、直径四センチほどのポールを、思い切り啜え込む。

「あつ、んくうっ! ……ああつ、クリトリスうっ。ぶつくり膨れた女騎士の皮剥けクリいっ! あつあつ、すごい感じますうっ!」

黒いピキニの上からでも、はつきりとわかるほどに大きくなった淫核を、ポールにきつく擦りつけると、愛撫によって敏感になつていた女体に、たまたま強く強烈な官能の波が押し寄せてくる。

身体にたつぷりと塗り込まれた媚薬ローションが、いよいよその魔性の真価を発揮し始める。

数十倍にまで高められた抗いがたい快感の中、一度卑猥な言葉を口に出してしまつた瞬間、濃い淫らな欲望が、誇り高いアイラの心を快楽欲しさに発情した、一匹の牝へと覚醒させていく。

「これほどまでに自らを貶めることができるとは……。素晴らしい牝の素養だな」

「見てみる、床が本気汁でべとべとになつている。媚薬のせいだけでなく、正義の騎士様は本当の淫乱のようだ!」

男たちは、たとえ無理やりだろうと、感じまくつている牝騎士会長を蔑みながら、そんなアイラをモノにしようとして、我先に次々高額の値をつけていく。

（す、すごいっ。私のポールオナニー見て、みんな興奮しているわ。こんなのいけないのに……悔しいの……!）

あまりの辱めに、今すぐこの連中を魔法で昏倒させたい衝動に駆られる。しかし名譽も誇りも、少女の純情でさえ、男たちが手に持つ紙切れの前には、唇を噛み、ひれ伏すしかない。それが牝であるということだ。

「あつ、あんっつ! だ、ダメ……っ。き、きますっつ! すごいクルツ! ああああつつ!」

その言葉は決して演技ではなかった。ゲストたちのいやらしい視線と侮蔑の言葉が、全身に突き刺さり、背徳の淫炎を燃え上がらせる油となる。

もう止めようと思つても止まらない腰の動きが、摩擦熱でピキニが破れんほど早く、激しくなつていき、プシュプシュと淫らな本気汁が、床に牝の水たまりを作っていく。

（こ、このままじゃイヤっちゃうっ!? 本気でイク……っ。こんな大勢の前で……お金欲しさにイク……っ!）

大好きな巧との甘く充実した絶頂感ではない。人に誇れる大義ではなく、ただお金を求めて絶頂する様を、衆人の前に晒してしまう。けれど――

「よおし、このままイッてみせたら、百五十万出すぞっ!」
「潮吹きなら、プラス百万だ! なんならもつとは

ずんでやつてもいいぞ、ふはは」

「くくく、お客たちもお待ちかねだ。派手にイケよ。金が欲しいのだろう、ワルキューレ?」

最後の言葉は仁三のモノだ。彼を含め、ゲストたちには情けや容赦、心からの善意などというものは無い。ただあるのは、極上の牝であるアイラの気高いプライドが、ポロポロになつていくことで得られる歪んだ快楽のみだ。

そんなもののために自分は……。
「わ、わかりました……っ。アイラはイキますっつ! お腹の底から声を出して答えた。

「わ、わ、わ……っ。アイラはイキますっつ! お腹の底から声を出して答えた。

（イ、イクわよっ。イクしか……ない! 悔しいけど、私にはお金が必要っ。……ごめんなさい、巧っ）

ポールに秘唇を押しつけ、一層強く腰を振り、媚薬でトロトロに蕩けた快感中枢を刺激する。

もういつそ、早く絶頂してしまいたい。早く恥を晒して、早くこの場を立ち去りたい……っ。

経験したことはないが、犯罪者に捕えられ、レイプされる屈辱とは、まるで異質の敗北感……。どれだけ正義を掲げても、金と権力の前に、育んできたあらゆる倫理観をばく奪され、惨めな晒し者へと墮落させられてしまう。

「あひいうっ! ああつ、んくつ、アツ、アツ、アアツ!!」

（な、なにこれえっ!? いつもやらされるオナニーよりすごいっつ! 私感じてるっつ! 悔しいのに本気で気持ちよくなつて……っ!）

子宮の奥深くが熱く滾り、仕込まれた淫蟲がプシュプシュと新たな濃厚媚毒を噴き出すのを感じる。絶頂を堪えることも、我慢することさえできない

辱めが、アイラの眠っていた被虐心を、本人の知らぬ間に開発し、定着させていく。

ポールと秘肉が擦れ合うたびに、グチユグチユ、ピチヨピチヨと淫猥な音が鳴り響く。ガニ股に広げた太腿がブルルッ! とわななき続け、ピキニの下の勃起乳首が痛いほど、疼く!

「も、もうイ、イクツツツ! あああつつつ、イクウウウツツツ!!」

アイラが最後に思い切り腰をグンツ! と跳ね上げ、皮剥け淫核と墜壁のヒダを壊れんばかりに刺激した瞬間、脳内のすべてが真っ白に染まり、屈辱にまみれた美しい尊顔が、倒れんばかりにグンツツ! と後ろに弾ける。

大粒の汗とローションが周囲に飛び散り、瞬間沸騰した牝の快感が、ポールを握ったまま硬直しているアイラの媚体をビクビクツツ! と淫猥にわななかせせる。

「プシユオオオツツツ!!」

「んあああつつ! 出てるうつつ! ああつつ、出ますつつ! 潮、アイラの潮噴き絶頂お……おおつつ、イグウウウツツツ!!」

男たちの要望通り、まるで本当の噴水のように淫らな弧を描きながら、ゲストのほうへとぶちまけられる。

調教された牝の身体は、アイラにさらなる辱めを与えるかのように、収まることを知らない潮噴きアクメ顔を、周囲にたつぷりと見せつけてしまう。

「ははっ、すごいイキっぶりだなあつ! たつぷり塗り込んだローションのおかげですか」

「いやいやこの女の才能だろう? 騎士といつても、皮剥ければただの牝ということを思い知っていることでしょうか」

「ああつ、あふあつ! み、見てくださいいっ。いつてますつつ。私イクツ! んおおつ、止まらないっ!

「イグツ、イクイクウウウツツ!!」

後ろにピーンツツ! と大きく背中を反らし、無様な白目を剥きながら、アイラは決して『気持ちいい』とだけは口にしなかった。それを言ってしまうと、完全な敗北を認めたことになってしまう。

要求は呑んだ。自分は快楽にも、権力にも、お金の魔力にも屈してなどいない。たとえイキ恥を晒しても、その矜持だけは守り抜きたかつた。

「あ、あひい……はあうつつ……おおおつ」

終わりにたくても終わらない。数分間にも及んだポールアクメのすさまじい快感の前に、アイラはたつぷりの汁気を帯びた身体を、両足を開いたまま、床にへたりこみ、大きく深い絶頂の余韻に浸っていた。

あとは落札した人物と、一晚の相手をさせられるだけだ。悔しくてたまらないが、こんな見世物にされるより、まだマシに思える。

「よし、他にはいいですね? この値段で落札だ。く、ほれアイラ。お前の値段が決まったぞ」

アイラの眼前に、仁三が持った電子端末が持つてこられる。しかし……。

「そ、そんな……。たつたこれだけ……なんて……」

提示された五百万という金額は、一見十分すぎるように思えるが、パーティの前に仁三が話していた金額とは、あまりにかけ離れた低い落札額だった。

「くくく、あの程度のダンスで、なにを期待していたんだ、アイラあ? あんなものはなあ、プライドを捨てさえすれば、どんな女でもできるものなのだよ。そんなことくらいしかできない女につける価値など、せいぜいこんなものだろう?」

高圧的な仁三の言葉を聞いて、全身に冷たい震えが走る。そのプライドを捨てるといふ行為が、どれだけ難しく、心をすり減らすか……わからない男ではないはずなのに、この男は――。

「でも、イ……いつてみれば、も、もつと……つて」

「ふふ、このゲストたちは普通では物足りない連中ばかりでな。もしさらに金が必要なら……その身体、その『もう一つの牝穴』も一晚差し出す、そういう誠意を見せてもらわんとあ?」

「……あ、あなたつて人は、どこまでつつ!」

男の言動、底意地の悪さに、普段濃厚なアイラの心にたまらない怒りが湧いてしまう。しかしこれが自分の踏み込んだ世界なのだ、痛感させられる。

「さあ、どうした? それともこんなはした金で終わりにするのか?! ならば聖アザリア学園はワシのものだ。恋人のせいで夢を失ったカレンを、せいぜい養ってやるんだな、はははっ」

「……っ。くうううっ」

巧を持ち出しての、人一倍使命感の強いアイラに対する挑発。人々を守る剣や魔法なら、こんな男に負けるはずはないのに、絶対に負けたくないのに……つつ!

「おおおつつ!!」

再びゲストたちが歓声を叫ぶ。それは自分たちを狩る立場だった魔法騎士アイラのプライドが、悪のルールに屈した悦びに満ちたものだった。

「さ、先ほどは大変失礼い……いたしました。め、牝騎士アイラの取引はまだ終わっておりません。ほ、本日卑しい私を落札していただいたゲスト様には――」

震える声で言いながら、アイラはポールに右手と左足を絡ませ、ゲストたちに汗とローション、それに愛液でベトベトになつていいる大きなヒップを、ぐんと突き出してみせた。

そして極小のピキニを横にクイッとずらすと、いまだ絶頂の余韻で淫靡にヒクヒクと痙攣する陰唇の上、露わになった不浄の穴――巧や仁三はおろか、

自分ですら弄ったことのない菊門を、右手の人差し指と中指でグイッ！と大きく広げていく。
「こ、この媚薬まみれの敏感初心マンコだけでなく……お、お尻、ううっ。まだ誰にも汚されていないケ……ああう」

あまりの恥ずかしさ、そして無念さで声がつまる。生徒会長として、生徒たちに凜とした笑顔を振りまいていた、それがすごく幸せだった日々がフラッシュバックし、愛する巧の笑顔、そして出がけに見せた心配そうな表情が浮かんで……バラバラに砕け散っていく。

「……………変態牝騎士の初物ケツマンコも犯していただきませうっ！ ほ、ほらよおくご覧くださいっ。名門でえ、有能な騎士でええっ……牝淑女の蘇芳アイラ、そのケツの穴に、あなたのチンポをぶちこんでくださいっ！！」
（い、言ったあぁっ。自分で言っちゃ……巧、わたしいいっ）

アイラの誇りを完膚なきまでに打ち砕く屈服発言に、男たちは勇んで値をつけていく。その額は、姫騎士の心をさらに踏みつけ、拭いきれない負のトラウマを刻み込む。

「くははっ、よく言った。褒美にワシからプレゼントだ。せつかくの処女アナルだからな。泣き叫ぶより、たつぷりヨガってもらわんと」

仁三がパンツと指を鳴らすと、SPが仁三に一丁の拳銃を手渡し、仁三はその銃口を、突き出されたままのアイラのお尻の媚肉に押しつける。

「な、なにをっ？！ あぐううっ！！」

問答無用で仁三が引き金を引くと、紫色の妖しい魔法陣が形成され、へそに描かれたものと同じ、黒蝶の刻印がジュアツツ！と熱く焼きいられる。

（ふ、あふうっ！ こ……これは非合法の魔弾っ？！ お尻が熱く……くはうっっ！）

左側の尻たぶに、悪しき魔法をマージングされたアイラのヒップ全体が急にカッと熱を持ち、背筋を駆け上がってきた甘い痺れが、理性を淫らな霧で覆っていく。

その混濁した意識の端で、仁三が落札完了の鐘を鳴らしたのが聞こえた。
そして先ほどとは比べ物にならない額を提示した男が、ニヤついた笑みと怒張した逸物をぶら下げて、アイラの元へと向かってくる。

「ふふ、みなには申し訳ないが、音に聞こえた『幻惑のワルキューレ』の処女ケツマンコは、私がいただかせてもらおうか」
アイラを落札したのは、四十代ほどの中年の男だった。身長は百七十中盤。見た目こそスーツを着たスマートな紳士風だが、マスクの下の表情は間違いない、仁三と同じ、性根が歪みきつた顔をしているはずだ。

「ら、落札していただきまして、ありがとうございます……っ。ど、どうか卑しい牝アナルを、ご賞味くださいませ……っ」
アイラは、ショックでおかしくなりそうな心を理性で鼓舞しながら、男に尻を向けたドッグスタイルをとった。

周りでは居残ったゲストたちが、惨めな四つんばいになり、尻を突き出しているアイラを、先ほどのように下賤な瞳で見つめている。
てっきり落札されたあとは、個室で落札者だけを相手にすればいいと思っていたのに、最後まで卑劣な衆人環視が続くなんて、気づけばあまりの悔しさからこぼれた涙の滴が、切なげに頬を伝っていた。
（うく、ぐす……。お尻を犯されるなんて……。そんなの無理だわ。あんな大きいの入るわけじゃないじゃない……っ！）

仁三に勝るとも劣らない男の巨大な逸物。その先端から立ち上るムワツとした熱気を、ほどよくプニプニした柔らかさと、押せば返す、張りのある弾力をもつ尻肌で感じると、恐怖からブルッとヒップ全体がわなわなしてしまふ。
「それでは、姫騎士様の初ケツマンコをいただくとするかなあつ！」

言った男の十本の指が、アイラの尻に思い切りグニリツと食い込み、まるでパンを引き裂くかのよう、少女の初心な秘門を、周りに寄った淫猥な競ごと押し広げてくる。
ドチュウウツツ！ ズニウウウツツ！！
凶悪な勃起ペニス、なんの予告もなくアイラの菊門を強引に押し開き、まだ指さえも挿入したことのない腸の中へと押し入ってきた、その瞬間。

「そん、な……いきなり……アアツツ！ なっ……はひいっ、なん……でえっっ！！」
正直、アナルをあんな怒張で犯されれば、快感などより痛みに堪え抜くことが重要だろうと思っていた。男たちは、痛みに苦しむアイラの様子を見たいのだとも。

しかし男が、力まかせに無理やり突き込んだ肉棒がもたらしたのは、ありえないと思っていた明確な牝の快感だった。
「あ、ああつ……これ、はうううっっ！！」
（い、入れられただけなのにお、お尻が熱い……っ！！ この魔術刻印、まさか私の身体を無理やりっ！）

身体強化・変身系の魔法を悪用すれば、人体の神経系や筋肉繊維を強制的に変化させることは可能だ。そして男がアイラに刻んだのは、尻、すなわち直腸を走る無数の神経を改造し、凶悪にして屈辱的な快感神経へと改造させるもので間違いない。
「あふうっ……。あ、い……はあ、はああつっ」



予想外の肛門快感に、アイラの喉がクイツと上を向き、碧眼が一瞬大きく見開かれ、切なげにキュッと閉じられる。眉は頼りないハの字を描き、唇はフルフルと震えが止まらない。

男はまだ動いてすらいない。ただ腕の大きさほどもある剛直が、無理やり腸道の中に居座っているだけだ。

本来なら異物を排出しようとする腸壁が動き、便秘と同様、たまらない不快感に陥るはずなのに……。

「ふあああ……んく、は〜、ふうんっつ！」

「くく、なんだその蕩けきつた顔は!? まさか挿入されただけで、軽くクイツってしまったのか? 『幻惑のワルキューレ』と闇社会で恐れられた女騎士が、ケツでもヨがるド変態だったとはねっ!」

男は不敵に言う、ピクンピクンッ! という淫らな痙攣を止められないアイラの両尻肉に手をかけ、腰をグイイツッ! と後ろに下げ始めた。

腰の動きにつられるように、直腸に入ったままの牡棒が、肉壁にびつしりと浮き出た、改造快楽神経を、ゆつくりと、颯るように刺激しながら、ズリユズリユと後退していく。

「ち、ちが……んふううううっつ! あふっ、あつうううっ、ほお〜おおつ」

ジワリジワリと引き抜かれていく男根に合わせ、直腸から気が狂わんばかりの快楽電流がピシピシと迸ってくる。

その快感は、媚毒を吐かれ続ける膣内に勝るとも劣らない凶悪なもので、男の言う通り、堪えようとしても、唇の端からねつとりとした涎とともに、甘く太い発情声が漏れ出てしまう。

(これ、本当にすごい……っ。ま、まさか私が魔法で、こんな身体に……っ。くうううっ!)

送り込まれた魔法量から、この魔法がかなり凶悪なモノであることは確実だ。

時間が経ち、完全に肉體改造が完了してしまえば、もう尻の刻印は生涯消えず、直腸も爆発的な性感帯に作りかえられたままになってしまう。

しかしアイラに抵抗は許されない。落札されたからには、一晚——すなわちおおよそ肉體改造が終了するまでは、男のいいなりにならなければ、落札額が受け取れない仕組みだ。

「くく、理解したような顔だな。私に落札されたのが運の尽きだ、ワルキューレ。一晚かけて、お前にたつぶり肛門の快感を仕込んでやろう、そらあつっ!」

男は菊門の入り口付近まで引き戻した肉竿を、腰に反動をつけたまま、再び一気に最奥まで挿入すると、力強い腰使いで魅惑の金髪少女のアナルを、思うさま犯し始めた。

パンパンッ! パンパンッ! ドチュドチュウウッ!

「ひあんっつ! あつくふうっ! あああつっ!」

(ひやうんっ、あつ、す……ごいっ!? お尻、私のお尻が……あつっつ!)

排泄物を出すための穴だと信じて疑わなかった菊穴が、今では揺らぎようのない快感を発する第二の陰唇へと変わっていく。

ヌボンッ! ズニユボォッ! と激しく力強いピストン運動が起きるたびに、お腹の中を直接掻きまわされる刺激が、一辺残らずすべて絶大な牝の気持ちよさになって、アイラの直腸に淫らな炎の渦を巻き起こす。

(ほ、本当に改造されて……っ。一突きごとに、お尻の性感帯り返されて……うっ!)

想像もしなかったアナルセックスの快感に、媚薬で犯された理性がまるで追いついていけない。

男の骨盤と自分の尻肉がぶつかり、パンパンッ! という生々しいセックスの音が響くと同時に、お腹

の入り口から下腹部までの肉道が、ペニスもたらす牝の力強さによってトロトロに蕩けそうになる。恥知らずに大きく開いた両脚は、壊れそうなくらいガクガクと痙攣する。弄られてもいらない陰唇からは、まるでおもらしでもしているかのような、大量の本気汁がブシユブシユと噴き出して、ムチムチの太腿を濡らしていく。

両脚だけでなく、両手の指の先まで甘く痺れていき、気を抜けば情けなく地面につんのめってしまうのを、肘……そしてその豊満な胸を支えにしてギリギリで耐えしのぐ。

「どうした、アイラ!? 改造された尻の感覚はどうだ? こっちはよく引き締まって……んくっ、通常の五倍の大金を払ったかがある、素晴らしいケツマンコの味だぞっ!」

「あつ、はううっ! そんなこと言わな、ひぐつっ、ん〜ん〜ん〜ん〜んっ!!」

男の侮蔑の言葉に、反論するどころか、ゾワリとした背徳の快感が、さらにお尻の快感を増大させる。ドチュンドチュンッ! パンパンッ! ジュブンッ!!

文字通り新しい性器となった肛門のありとあらゆる筋肉が、ゲストの巨大な逸物を、極上のデザイナーのように、勝手にしゃぶりつくそうと蠢いてしまう。

欲情しビキビキに膨れ上がった肉棒と、ジワジワと溢れ出る腸液。それらを不浄の穴の中で混ぜ合わせ、強烈に擦り合わせる媚肉。それが肉ヒダの表面に剥き出しになった極悪快楽神経に、狂乱ともいえるアナル快感を、休む暇も与えず送り込んでくる。

(キ、クウウッ! これえつ、あう、お尻なのに、すこ……ふくうっ!)

グチユグチユといやらしく下品な水音が、お尻から鼓膜を通して脳髓に直接響くと、全身がカッカッと熱を帯び、騎士の矜持が墮落した牝の欲求に侵食



チポ
入れてもらい
たいんだろ
オバさん♪

はあ…あ
待てえ…

今度は何しゆる
つもり…らあ

女帝と死神が味わり
最期の絶頂!

監獄艦船3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode
09 雌豚母娘

くすのき
漫画 **楠木りん**
COMIC
原作 **Anime LiLiTh**

物欲しそうに
マコビるどろに
させちゃってよ

ふざ…
けるなあ!
ふう…うう

ケツマコビ
キメろよ
ババア!

くわ



だったらもう一回
イカせてやるよ!

へっ! さつきから
イキっぱなしの
くせによ!

イッでない…
誰がきさまらの
ような
クソガキに…

うん

やめ……っ
おお！
おひいっ！

はあ……ぐっ
下衆共め……え

へへっ
感じちやって
るっしょ？
オバさん！
ほらかメラに
向かって
ピースピース！

ぎやはは！

女帝が
ケツマコされて
ダブルピースして
やがるぜ！

くっ……
わわたじの
意思では
ないい！

何だかんだいって
マコ
ドロドロだよ？

ひゃっ！
そこ……指
入れ……

すげえなり
指六本って
どんだけ
ガバマコ
なんだよ！

ら……まれえ！
えあ！
えひい！！

どうしたあ？
もうイキそうに
なってんのか？

ふひっ…
誰が…
イクか…!
わ私を誰だと思ってる…!
うおっおお!!

あはり
メス豚
オバさんだろ?

アクメキメまくりの
肉便器
オバさんだよな!?

きしやまらあ…!
んおっ!?
おほおおっ!?

イキたい
んだろ!?

ケツマコで
ザーメン飲んで
イケ!

おっ!
うおおっ…!?

イケよ
ババア!



はい
イッたあ！
ババア
イキましたー！

ゴゴゴゴ
ゴゴゴゴ

おひつ！

おひつ！

出たー！
子持ちババアの
嬉ション
ガンギマリー！

フキ
アアア

ド
カ

ビクッ

まだまだ
これからだぜ
覚悟しておけよ！

なあ？
女帝さんよお！

クソガキに
イカされる
気分はどつだ！

馬鹿な…あ
こんな馬鹿な
事…おつ
おひつ！
おひいん！

これで
イッたの
四回目だよな
オバさん！

マ
マ
マ

ビクッ

キ
キ
キ

あああ！
あああ！

オ
ニ
ニ

キ
キ
キ



じゃあ印付けて
おかないとね

へあ…あ
うう…



おお!?

キラちゃん
三穴で
イッチャった
のかい?



今度は
オッチャんたちを
気持ちよくして
もらおうかな

や…っ
いや…



マコも
十分にほぐして
おいたからね!

オッチャんの
デカチポでも
すぐ入るよね

オジさんの
チポたっぷり
味わってもらう
からね!

そら!
しっかり
啜えてよ
キラちゃん

ちゅるる
ちゅるる

うは、可愛い
ピンク色の乳首も
ピンピンに勃起
しちやってるね

殺しゅ…
殺しましゅよ…
んぐっ!?
むぐぐぐっ!?

アキ

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

呂奉先

淫虐陵辱受悦墮落

女体化

三國無双の武将
女体化絶頂に飛翔す—

あおいむらまさ
小説 **蒼井村正** 挿絵 **tes me**
NOVEL ILLUSTRATION

ご案内

この小説には分岐が設けられています。それぞれの後編ごとに1~3の番号がふられていますので、前編の末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

前編

「うわあああッ！ 呂布だあ、呂布が出たぞお！」

川と丘陵に挟まれた隘路で騎馬武者の奇襲を受けた賊軍は、大混乱に陥った。

「我こそは呂布なりッ！ 貴様等の將は何処かッ！」

隊列を崩した兵たちの間に、愛馬・赤兔を駆って単騎で躍り込んだ武將の名は、呂布、字は奉先。

その名を聞いただけで、泣く子も黙る猛將として、知らぬ者のない武芸の達人だ。

筋肉質で長身の堂々たる体躯に、燃え盛る炎のように波打つ赤毛の髪が印象的な美丈夫で、鳶色の瞳には、抜き身の刃物のような鋭い光が常に宿っている。

「退け、雑兵ども！ むんっ！ フンッ！ はあああッ！」

見事な手綱さばきで駿馬を操りながら、手にした武器を右に、左に振り抜くたびに、まるで草刈りでもするかのようには雑兵たちがなぎ倒され、川に叩き落とされてゆく。

「こらあ、おっ、お前ら、隊列を崩さずオレを守れッ！ 奇襲を受けてしまふとは、物見の兵はなにをしておったのだ!!」

ほとんど潰走状態の兵たちを恐怖に裏返った声を上げて叱咤しつ、馬首を巡らせて逃げだそうとしている敵將

を見つけた呂布は、放たれた矢のような勢いで突撃する。

「貴様のその首、呂布奉先がもらったぞ！」

「ひいッ!? ぐはあああッ!!」

立ちふさがる雑兵どもをあつさりと蹴散らして距離を詰めた呂布の一閃で、敵將は反撃もできずに討ち取られた。

「これでおしまいか？ 単騎で突っ込めば、少しは楽しめるかと思つたが……脆すぎるッ！」

不満気に吐き捨てた猛將は、後方に待機させていた配下の兵たちに後始末を任せ、都へと帰還した。

その日の夜、呂布はささやかな勝利を祝う祝宴の場に居た。

「呂布よ、此度の戦いも見事であった。聞けば、数百の敵兵を単騎で蹴散らし、將を討つたというではないか。相も変わらず頼もしき武勇の才よ」

部屋に響き渡るような大声で呂布の労をねぎらった髭面、肥満体の男が、酒杯を高々と掲げる。

彼の名は董卓。官位は相国。地方領主から権謀術数を駆使しての上がり、今や、都の権勢を欲しいままにしている武將だ。

「此度も退屈な戦であった。俺が討ち取つたのは、賊軍を率いていた將と、その護衛の兵、せいぜい数十人程度。残りは恐れをなして潰走した臆病者ども……。烏合の衆よ！」

欲求不満気味の様子で、呂布は吐き捨てる。

「お主の武勇の前では、数百の兵も烏合の衆にすぎぬか？ なにはともあれ、戦は勝てばそれでよい。酒肴を用意した故、共に勝利を祝おうではないか！」

董卓が手を叩くと、贅を尽くした料理の数々が運ばれてきた。

呂布が単独であげた武勲を祝う宴故、他の武將は一人も呼ばれていないにもかかわらず、豪華な料理が食いきれぬほど大量に目の前に並べられる。

（相変わらずの贅沢三昧……。戦にも出ずに王宮内にふんぞり返って、これだけいい物をたらふく食っていれば、あの醜く膨れあがつた身体になつてしまふのも道理だな……）

董卓の肥え太つた肉体を視界の片隅に捉えながら、呂布は思う。

その卓越した武威によつて、董卓の権威を支えている呂布であったが、だからといって彼に絶対の忠誠を誓っているわけではない。

機会あらば、董卓に成り代わり、権力の頂点に立つという野心を内に秘めているのだ。

「料理もそろつた、宴を始めようではないか！ 酒を持ってこい！」

酒宴の開始を告げる董卓。

「今宵供する酒は、はるか西方よりの使者がワシに献じた極上の果実酒じや」

異国の装飾が施された陶製の酒瓶から杯に注がれたのは、血のような濃赤色をした酒であった。

酒杯はまず、毒見役の女官たちに手

渡され、料理と共に吟味される。

彼女らは、王宮に仕える文官、武官の子女から選出されており、毒見役であると同時に、王宮の官僚たちが謀反を企まぬようにする人質として機能していた。

猜疑心の強い董卓が考えた、謀反封じの策である。

毒見にも、彼の好む退廃的な趣向が凝らされていた。

毒見役に任じられた女たちは、酒や料理を口移しで与え合い、毒や異物が混入していないことを身をもって示すのだ。

女たちの舌と唇の狭間で山海の美味が行き交い、舌を絡め合いながら口移しされた酒を、目元を艶やかに紅潮させ、恍惚の表情を浮かべた美女が、ゴクリ、と白い喉を鳴らして飲み込むさまは、倒錯的な色香を感じさせる。

淫靡な毒見を済ませて渡された酒杯を受け取つた呂布は、馥郁たる香りを立ちのぼらせる美酒に、懐から取り出した銀の細棒を挿し込んでゆつくりと攪拌した。

毒が含まれていれば、磨き上げられた銀の表面に曇りが生じるため、異物の混入を検知できるのだ。

「異常、なしか……」

酒杯から引き上げた毒見棒を檢視した猛將は、小さくつぶやき、頷く。

呂布ほどの勇将なればこそ、陰謀渦巻く王宮内においては暗殺を警戒し、念には念を入れる必要があつた。

「毒見も無事に終わったようじゃな？ さあ、乾杯しようではないか！ んぐんぐんぐん……ぶはあぁ！ こいつは勝利の美酒にふさわしい、実に美味しい酒じゃ！」

大声を張り上げ、酒杯を掲げた董卓は、異国の美酒を一気に飲み干した。
「……」

無言で領いた呂布は、酒杯を手に取り、満たされた酒を一口、すすす。
「どうだ、よい酒であろう？」

すでに軽く酔いが回ってきているらしく、髭面を紅潮させた董卓が、耳障りなだみ声で問いかけてくる。
「ふむ……俺の口には少し甘すぎるが、悪くはない」

「そうであろう？ ワシに仕えておれば、美酒も美食も美女も思うがままよ！ グハハハハハハッ！」

権威の極みに君臨する男は、傍らに侍らせた女官を抱き寄せ、薄衣越しに透けて見えるたわわな乳房を荒っぽく揉みこねて豪快な笑い声を上げつつ、料理を貪り食い、酒をがぶ飲みする。

董卓は、全身が欲望でできているかのような男であった。

権勢欲、物欲、食欲、そして性欲、あらゆる欲望が常人よりはるかに強く、濃く、そして激しい。

特に性欲は鎮まることを知らず、目についた美女、美少女を片っ端から闇に連れ込んで陵辱する悪癖は、王宮に仕える文官や、配下の武將たちを密かに悩ませていた。

面と向かって苦言を呈するような者は、とつづく昔に凍清され、今や董卓の暴挙を止める者は誰も居ない。
（董卓よ、せいぜい調子に乗るがいい。悪行が広く知れ渡れば、貴様を討つた者に対する賛辞もそれだけ強まるのだからな……）

暴君に取って代わる野望を抱いている呂布は、女官を玩弄する男を鶯色の瞳に映しながら、密かに思う。

（この世には、まだまだ俺を楽しませてくれそうな男將、猛將が数多く居るといふのに、奴らも機をうかがっていて動こうとせぬ。これでは武芸の腕が錆びついてしまうわ！）

旺盛な食欲を見せながらも、呂布は苛立ちを感じていた。

董卓が実権を握って以来、各地の有力な武將たちは、各自の領地で戦力を温存している。

近頃は大きな戦もなく、呂布は都の近隣で略奪を働く賊どもを討つて無聊を慰めていた。

（董卓よ、貴様を討つ絶好機を待っているのは俺とて同じ事。貴様のその太鼓腹を斬り裂き、都の実権を手中に収めた暁には、万の軍勢を率いて軍を進め、覇道の障害となり得る各地の武將どもをすべて平らげてやるわ！）

伏せた瞳の奥に野望の炎を隠した英雄は、董卓の馬鹿笑いの声と女たちの嬌声を聞きつつ、黙々と料理を平らげ、酒杯を傾ける。

酒宴は滞りなく進み、踊り子たちによる舞が披露される頃合いとなった。
「今宵は気分がいい。久し振りにワシも舞うぞ！」

でつぷりと太った体軀を揺らしながら立ち上がった董卓は、肌もあらわないでたちをした踊り子たちに加わって、ぎこちない動きで舞い始めた。

（やれやれ、あの不細工な踊りを、今宵もまた見せられるのか……）

フウツ、と鬱陶しげなため息をついた呂布の身体に、突如、異変が生じる。下腹のあたりに熱気の塊のようなものが生じ、それが一気に拡がって、全身を炎に炙られているかのような火照りが包み込んだ。

「むううっ！ な、なんだ？ まさか……毒!? クウウウウッ！」

口内に指を挿し込み、胃の内容物を吐き出そうとする呂布であったが、手足の力が抜けて、思うように動けない。グリユッ！ ぐりぐりぐりぐり！

猛將の股間を強烈な痛みが襲う。まるで、見えない手に男根を鷲掴みにされ、身体を奥に、力まかせに引きずり込まれているかのような異様な激痛であった。

「ぐおおおっ！」

獣のような咆哮を上げ、仰け反り倒れた呂布は、周囲の酒肴を蹴散らして苦悶する。

楽士たちの演奏が止み、給仕役の女官や踊り子たちが悲鳴を上げて逃げ散った。

（董卓は!? 奴も酒や料理を口にしたはず……）

床上で身悶えしつつ、視線を巡らせて董卓の肥満体を探した呂布は、周囲を護衛の兵たちに囲まれ、冷たい視線で見下ろしてくる暴君の姿を目にして顔を引きつらせる。

「はっ、謀つたな……董卓ッ！ ぐはうううッ！」

はめられたことを悟った呂布は、董卓に食ってかかろうとするが、全身を包む熱気と倦怠感がさらに激しくなり、呼吸さえままならない。

（無念ッ、俺は野望も果たせず、このまま、毒で死ぬのか……）

ドクッ、ドクンッ！ ドクンッ！

熱気に包まれた心臓が今にも弾けてしまいそうに脈打つたびに、全身の筋肉が波打つ湖面のようにうねりながら形を変え、骨格までもがギンギンと軋み上げて変貌してゆく。

毒の効果にしても、あまりにも異様な状況であった。

「あがううううううッ!!」

猛將として恐れられた男にあるまじき苦鳴を祝宴の場に響かせた呂布は、釣り上げられた魚のように床上で身悶えすることしかできない。
数分間の苦悶の後、全身が煮えたぎる軟泥と化したかのような異様な感覚が唐突に失せ、飛びかけていた意識がゆつくりと戻ってくる。



「くは、ハアハアハア……はああうつ、な、なんだ、声が……ッ!?」

荒い呼吸の合間に漏らすうめき声に、妙に甲高く艶めかしい響きが混じっていることに、陥れられた猛将は気づく。

「くうう……ッ! 一体、なにが起きていたというのだ!?!」

おのれの喉から絞り出される耳慣れぬ声に困惑しつつ、脱力した身を振ってうつ伏せになった呂布は、床にこぼれた酒でできた液溜まりに自分の顔を映してみる。

「なっ……こつ、これは誰ぞ?!」

酒溜まりの中から見返してきたのは、ぼつりと肉厚な唇と、鷹のような鋭い目つきが野性味を感じさせる、いかにも勝ち気そうな顔立ちをした美女の貌であった。

「……これが俺の顔だというのか?! まさか……身体のほうが……!」

恐る恐る肉体に視線を転じると、筋肉質で大柄だった肉体は、たおやかな曲面で構成された女体へと変貌してしまっていた。

太くたくましく力を漲らせていた手足は細くたおやかな、女のそれであり、分厚い胸筋を盛り上がらせていた胸板も、お椀を伏せたようなたわわな乳房に取って代われ、荒い呼吸のたびにフルフルと柔らかく揺れている。

身体全体が一回り縮んでしまったように、身にまとっていた着衣も緩み、身悶えのせいで乱れきって、あらゆる美しい姿になっていた。

「俺が……俺が女人に……これも毒のせいなのか?! それとも、夢か?」

床に伏したまま動けぬ猛将は、汗まみれになった美貌を歪め、呆然とつぶやく。

衝撃のあまり、これが夢か、はたまた現実なのか曖昧に感じられた。

「これは断じて夢などではないぞ! 呂布よ、お主が女に変わる一部始終、楽しませてもらったぞ。転性の秘薬は効果できめんのようだ。グハハハハッ!」

床上で呆然としている呂布を見下ろし、乱世の奸雄は高笑する。

「転性の秘薬、だど!?!」

女体化した猛将は顔を上げ、怒りと憎悪に燃える鳶色の瞳で董卓を睨み付けた。

「左様。始皇帝に仕えた方士、徐福も目指したという東の果てにある神仙の国、蓬莱よりもたらされたといわれる秘薬を、貴様が飲んだ酒杯に仕込んでやったのよ!」

不健康に太った髑面に邪悪な笑みを浮かべ、自慢げに解説する董卓。「毒見も入念にしたはずなのに……不覚ッ!」

巢から落ちたひな鳥のように、床上で力なく悶えながら、女体化した猛将は無念の形相を浮かべる。「男が飲めば、お主が身をもって体験しているとおりの女体化するが、女人にはなんの効力もない。毒見棒にも反応せぬ秘薬なのじゃ!」

「ぐむうううッ! おのれ、董卓ッ!」

憎悪に震えながら立ち上がろうとする呂布であったが、女体化した肉体は骨を打ち砕かれた蛇のように床上でくねり悶えるばかりである。

「お前の武勇を失うのは惜しいが、寝首を掻かれてはかなわぬからな。謀反を起こされる前に、先手を打たせてもらったぞ。衛兵ども、逆賊、呂布を捕らえよッ!」

女体化した肉体をわななかせせる呂布の周囲を、宴会場に呼び込まれてきた衛兵たちが取り囲んだ。

「りよ、呂布殿は何処に!?!」

衛兵隊長が、おっかなびつくりの様子で宴会場を見回す。

「たわけがッ! そこに伏せておる女が、まごうことなき呂布よ! 子細はどうでもよい、早く捕らえて厳重に拘束せいッ!」

状況が呑み込めず、困惑している兵たちに董卓が怒鳴る。

「おつ、おい、この女人は、本当に呂布殿なのか?」

「そんなこと、オレが知るわけないだろう? 董卓様の悪ふざけだといいただか……あの剣幕だと本気のようなな」

床に伏した女人化猛将を取り囲んだ数十人の兵たちが、おっかなびつくりの様子で囁き交わす声が聞こえてくる。捕縛棒を手にして、包囲の輪を狭め

てくる雑兵たちの顔は、緊張と困惑、そして畏怖に強ばっていた。

女人化しているとはいえ、古今無双の武人として名高き呂布の捕縛を命じられたのだ。

状況の異様さも相まって、兵たちは手をこまねいてしまっている。

（雑兵どもは俺を恐れている。たとえこの身は女に変わっていても、董卓さえ討ち取ってしまえば、こいつらは拳を返して俺に従うはず）

反撃の意思を失っていない女体化猛将は、床にガックリと突っ伏し、不用意な兵が近づいてくるのを待つ。

「なにをしておる! 早く捕らえぬと、貴様等も処罰するぞッ!」

遠巻きして攻めあぐねている衛兵たちの様子に焦れた董卓が再び怒声を張り上げた。

「ハッ! たつ、直ちに……!」

功を焦った衛兵の一人が、呂布の首筋を抑えにかかると、

「今だッ! ムンッ! くううッ! はああああッ!!」

素早く身を翻しつつ棒を奪った呂布は、床に片膝をついた姿勢のまま、反撃を試みる。（身体の芯に力が入らぬ……だが、それでも雑兵ごとにおくれを取るような俺ではないッ!）

「フンッ! ぬんッ! たあアッ!」

凜とした女声の気合いを発しつつ、棒を振り回す。

男であったときは比べものになら

天才発明家同士の抗争が生んだ
常識を覆す一品!

本誌
初登場
!!!!

漫画
COMIC

じゃがうさ

なっ…
なんだ…?

一体何が
起こった?

私のペニスに
繋がれたコードから
電流のようなものが
走ってから—

このグラハムベルの
偉大な発明によって
少女にされた肉体を
確認するといひ

ふふっ
さあ顔上げて
鏡を見たまえ
エジソン君

鏡…少女…?
ここには…
これがかさか
私…なのか!?

ライバルは
女性化させて
孕ませる

う嘘だこんな
事が現実—

貧相だった
イチモツも
陰核と成れば
立派なモノ
じゃないか

どうかね
紛れもなく君の
身体だろう?

はああっ!?

あっ!?

ななんだ
この感覚は…!?
どうしてっ
どうしてこんな
事に—ッ

いいい

いいい

—数分前

ややめろ
グラハム・ベルッ
気でも触れたか!?

特許の件で
腹を割って話し
たいと言っから
来てみれば…

これは一体
何のつもりだ!?

言葉通りだよ
エジソン君

まあ
「腹を割る」のは
君の方だけ
だがね

…何を言っている?
大体特許の申請は
私の方が…ッ

本当の発明王とは
このような物を産み出した
この私の方だと
いうのだ!!

まったく…
イライシャは素直に
示談に応じたとい
うのに

君は
発明王などと煽られ
思い上がり
過ぎたようだ

千千…
千千千ッ

※イライシャの本名は「イライシャ・クレイ」
ベルと同時期に電話機を発明した人物だが
わずかにベルの方が権利出願が早かったため
特許を取得できなかった

理解したかね？
これこそが本物の
発明というものだ

ふふ
ふふけるなっ

こんなインチキが
信じられるかっ

ふんっ
姿は変わっても
頑固なのは
変わらずか

ではその身体に
直接理解させて
やろう

もぞ
もぞ

くくっ
さっきから
何なのだっ

入ニスを軽々
触られただけで
勝手に声が
漏れてしまっ

そら男の感覚とは
全く違うだろう

し知るかっ
こんな感覚が
何だと言うのだ

うあっ!?

うあっ
うあっ

うんっ

うんっ
うんっ
うんっ

うんっ

うんっ

うんっ

うんっ

まったく…
ならばこれで
どうだ

何と言われようと
私が男である事は――

…なっ
あ…？

わ私の
ペニスが
無い…！

さあ
しっかりと
目を凝らして
見るがいい

くはあ

ふおお
！！

!?
バカな…
この穴は
まるで――

トド



気高い犬の姫が
肉欲の底に堕ちていく…

尿隷犬姫 シエリル

小説 NOVEL 小杉信太 挿絵 ILLUSTRATION なるたき 鳴滝じん

「野郎ども！ 全速力で突っ切れ！」
リザードマン山賊団の首領は手下のトカゲ戦士たちに叫んだ。

片田舎の村を襲撃した帰りだ。あと少しで忌ましい森を抜けられる。

爬虫類から発生した魔物の中でも、彼らは湿気の多い場所に適応していない。灼熱の不毛地帯こそがホームグラウンドである。

この先にある荒野へ逃げ込めば、こちらの勝ちだった。

やがて、前方が明るくなってきた。勝った！

山賊団の首領がホッとしたとき――
「猛大王大炸裂！」

「うおっ……！」

森を抜けると同時に、眩い光が視界いっぱいひろがった。

紋章霊砲！

術式魔法の一種で、高位の戦士しか使えない攻撃魔法だった。その絶大にして無慈悲な破壊力は魔王軍一個師団にも相当するという。

「ぐへええええっ！」

山賊団は、一撃で吹き飛ばされた。

「も、もう勘弁してください、姫さま！ あつしらは、しがな山賊なんです……もう、このへんの村は襲いませんから……！」

「黙れ！ 痴れ者め！」

伝説の聖魔槍を構えて一喝したのは、凛々しくも勇猛な戦姫であった。彼女の名はシエリル・ガーランド。

聖天族ペディグリード国の高貴な姫にして、大きな戦においては必ず先陣を駆け抜け、近隣諸国に勇名を轟かせている戦姫であった。

切れ長の瞳が涼しげで、凛々しい美貌だった。花びらのような唇は、紅をつけていないのに赤く、不敵な微笑みを作っている。

ストレートのロングヘアは眩い黄金色だ。

誇り高い犬耳が艶やかな髪の毛のあいだから飛び出していて、勇猛な戦姫でなければ、この場で押し倒したくなるほどの美女だった。

すらりとした長身に、機動性を重視したレオタード型の戦闘服が似合っていた。腰布を革ベルトでとめ、防御魔法をほどこしたマントを威風堂々となびかせる軽快さと優美さを併せ持ったデザインであった。

「リザードマン風情が、私を『姫』などと気安く呼ぶな。『閣下』と呼ぶがよい」

「はは、シエリル閣下！」

首領は服従を示し、手下とともに平伏していた。

「ふん、まあよい。もう二度と我が領地を荒らすでないぞ？」

勝ち誇ってむんと反らした胸元は、二つの砲弾を押し込んだような破壊力の盛り上がり方を誇示し、薄い生地越しに先端の突起と乳輪の淡い膨らみまで浮かび上がらせ、強烈な色香まで主張していた。

「わ、わかりやした！」

「では、勝者の権利を執行する。そのまま土下座しているがいい」

「へいっ！」

首領は震えながら、ますます額を地面に擦りつけた。

これからなにをされるのか、よく承知しているのだ。

シエリルが歩み寄ってきた。たつぷりと肉の充実した尻がふられ

切れ上がった股下から伸びた美味しそうな太ももが開き、首領の頭をしなやかな長い足でまたぐ。

そして、ぱちんつ、とボタンを外す音が聞こえた。

「ん……んふっ」

どこか切ない吐息を漏らして、いつもの儀式を開始した。

首領は観念して息を呑む。

ちよろ、ちよろ、と熱い液体が落ちてきた。それは勢いを増し、じよぼじよぼと頭を濡らし、地面にむけた鼻先まで滴ってきた。

戦姫の新鮮な小水だ。

聖天族には敗者にオシッコをかけるイヤな習性がある。太古からの本能に刻み込まれた衝動に従っているのだから、神聖な儀式とし、世界に秩序をもたらず力があると信じているらしくった。

だから、いつでも放尿できるように、戦闘服の股下が開くようになっていたのだ。頭を上げれば、高貴な姫の陰部が丸見えなのだろうが……。

「これ！ 上を見るでない！」

「ひぐっ」
がしつ、と頭を踏みつけられた。

「んっ……」

腰をふって最後の一滴をふり落し、シエリルは気持ちよさそうに呻いた。

（天女め！ この屈辱は、いつか犯して返してやるぜ！）

首領の腹は怒りで煮えていた。

夕陽が眼に染みる。

「くあーっ！ 悔しいよ、悔しいよお、大将ううう！」

せつかくの略奪品を村に返還させられ、リザードマン山賊団はトポトポと帰還の途についていた。

「まったくよお、バリバリの聖騎士軍とかならともかく、あんな雌犬一匹にやられるなんて……」

「知らんのか？ ペディグリード国のシエリル姫といえど、魔軍騎士団でもビビるバケモン女じゃねえかよ？」
「じゃあ、しょうがねえか……俺たちや、しがねえ山賊なんだし……」

「うるせえ！ てめーら、泣きごとをほざくんじゃねえ！」
首領は一喝した。

「情けない気持ちは、こつちも同じだ。これでも魔王軍第六十七師団の百人隊長をやっていた俺様が、なんで落ちぶれて山賊なんて……」

神話の時代に聖と魔が分裂してから、数えきれないほどの戦いがあり、このたびも数百年の長きにわたって、聖に

祝福された種族と魔に仕える種族が覇権を争った大戦が終わりを告げ、世界は平和になってしまった。

とはいえ、戦時体制を解除するとなれば、巨大な軍隊を維持する必要もなく、大幅に人員が削減されて彼らのような山賊団が各地で無数に誕生してしまい、戦後の混乱を持続させていた。

「あの脳筋女め、俺たちトカゲ族を見下しやがって！」

「なにしろ、戦うために生れたような雌犬だ。戦争がなくなつて、わしらを苛めてストレス発散してやがんだ！」
被害妄想の気もある。が、たしかにあの戦姫は強いことを鼻にかけ、下等魔族などゴミのように見下しているところがあつた。

（あの獣女をなんとかしないと、山賊団の名折れだぜ！）

シエリルは治安維持と称して、毎日のように領地の見回りをしている。こちらは村を襲うたびに討伐され、山賊も廃業寸前に追い込まれていた。

「うへへ、ご褒美ありがとうございます。やすだ〜」
手下の尿マニアは、うっとり顔で戦姫がぶつかけてくれた黄金水の感触を脳内でリピートしている。悦んでいるのは、こいつだけだった。

「尿か……」
正面から挑んでも勝ち目はないが、犬族の習性を利用すれば……。

「よし、一計を案じてみるかよ」
にたり、と首領は野卑に笑つた。

戦姫は猛つていた。

「おのれ、山賊どもめ！ 逃げまわるとは卑怯だぞ！」

今日も領民からの訴えがあり、性懲りもなく村の掠奪に明け暮れているリザードマン山賊団を追討していた。前回敗者の儀式だけで許してしまつたが、もはや容赦なく殲滅してやるつもりでいた。

だが、荒野と砂漠はリザードマンのホームグラウンドである。連中は巧妙に逃げまくり、なかなか捕捉することができなかつた。紋章霽砲を放つても、砂の中に潜つて姿を消し、神馬ヴォルハートの俊足で追つても、今一步のところで見失つてしまうのだ。

「むう……ここはどこだ？」
つい頭に血が昇つて、王国の領土を出てしまつたらしい。

未知の熱砂漠へと踏み入つていた。陽射しが強烈で、熱風が王族の白肌を容赦なく焼く。見渡しても砂ばかりで、魔の下僕であるトカゲ族にはふさわしい荒涼たる風景がどこまでもつづき、瑞々しい生命を拒絶する不毛地帯であつた。

「ふん、今日のところは、ここまでにしておこうか。——次は必ず討伐してくれるぞ！」

隠れているはずのリザードマンにむかつて吠えた。

（だが、帰る前にマーキングだけはしておくか）

ここまでは踏破したという印をつけることにしたのだ。第一、自分のテリトリーを示す尿の匂いがないては落ち着かなかつた。

（さて、どこがいい？）
見渡すばかりの熱砂だから、地面にかけても砂に吸いとられるばかりで、すぐに乾いて風に散らされてしまうだろう。

「うむ、あそこがいいか」

広大な熱砂から、ところどころに頭突き出している岩を見つけたのだ。

もっとも近い岩まで愛馬を寄せ、ひらりと降り立つた。

岩肌は風化しているが、人工的に削り出された円柱形で、砂の下に隠れている部分を掘り起こせば、かなり大きな遺物が出現するだろうと想像できた。

辺境の古代文明に興味がないシエリルには、どうでもいことだつた。感慨もなく、大腿で歩み寄つて股下のポタンを外した。下着は着けていないから、まだ雌の悦びを知らない無垢な秘裂が剥き出しになり、濃密に茂つた恥毛が熱風にそよぐ。

足を肩幅ほどに開き、軽く腰を突き出したスタイルで、めらり、と自分の指先で密やかな扉を開く。朱色の粘膜が覗き、溝の底にツンと小さな針先で穿つたような尿道口が見えた。

んっ、と下腹部で軽く力むと、アヌスの窄まりが収縮し、包皮にくるまれた陰核も運動して蠢く。放尿が開始された。

大自然の中で乙女の芳香が立ち昇り、岩肌を黒く濡らしていく。ここだけではないから、適当に切り上げて次の岩まで馬を走らせた。これを五回ほど繰り返したところで、さすがに尿が尽きてしまい、喉の渇きも覚えた。

そのとき、きらり、と水面の反射を眼が捕えた。

「おお、オアシスがあつたぞ。——いけ、ヴォルハートよ！」

それほど大きな水場ではなかつたが、砂漠を横断する旅人が飲むには十分な水量が溜まつていた。濁りも少なく、危険な病原菌が繁殖している気配はない。水辺のまわりにささやかな草木が生え、この砂色の世界に癒しを添えていて、テール状の大岩が作る影で強烈な陽射しから身を護ることもできた。

シエリルは両手で水をすくい上げ、喉を鳴らして渇きを癒した。不純物が混ざっているのか、少し妙な味がしたものの気にもせず水分を補給する。それほど水への飢えは強烈だつたのだ。

愛馬ヴォルハートも長い鼻先を水面に突っ込んで、貪欲に水を飲んでいたので……当然、長い脚が崩れ落ち、水辺で横倒しになつた。

「ど、どうし……た……」
口がもつれ、激しい眩暈に襲われた。身体が揺れる。がくん、と両膝をついた。

（し、しまつた……水に毒……）
もはや意識を保てず、シエリルも倒

れてしまった。

どこに隠れていたのか、ぼやけていく視界の中に、リザードマンの足が近寄ってくるのが見えた。

意識が戻ると、すでにあたりは真っ暗であった。

「……ここは、どこだ？」

夜だ。

満天の星空だ。

頭の芯が火照り、まだぼんやりとしていた。背中の感触は堅い。水場の巨岩に乗せられているのか……。

「おや、これはシェリル閣下、ようやくお目覚めですか？」

からかうような声に眼をむけると、追いまわしていた山賊団の首領がニヤニヤ笑っていた。

不穏な気配を察して跳ね起きようとしたが、意識はしっかりとっているのに、身体が自由に動かなかった。

(縛られている！)

彼女は王家のマントを剥ぎとられ、両手を腰の後ろにまわされて、ロープで拘束されていた。足首もしっかりと縛られ、股を大胆に開かれた格好で固定されて、誇り高い戦姫に恥辱のポーズを強要している。

「ふん……私をどうする気だ？」

シェリルに動揺はなかった。弱みを見せれば、この手の下種は果てしなくつけ上がるだけなのだ。

眼だけ動かして周囲を観察すると、巨岩の上で燃やされている篝火が見え

た。下を覗き込むことはできないが、リザードマンがひしめいているらしく、十匹以上の気配が夜気に乗って伝わってきた。

「てめーはな、これから、俺たちの公衆便所になるんだよ！」

首領は、すつかり勝ち誇った顔だ。

「……なんだと？」

「はっ、睨んでも怖くねえよ。ほれ、身体に力が入らねえんだろ？ ご自慢の魔法はどうだい？」

聞かれるまでもなく、シェリルもさつきから試していたところだ。

(……ダメか……)

手のひらに刻まれた聖犬族の紋章を触媒にして、加護精霊の力を放出する攻撃魔法がいくら念じても発動しなかった。

「おまえがシオンベンひつかけていた岩があつたら？ 罰当たりめ！ あれは古代トカゲ族の聖遺物なんだよ。あの配置が一種の結界になって、英雄種族の魔力を封じているのさ」

首領はゲラゲラと笑った。

それにあわせて、ひやははっ、と手下のリザードマンたちも哄笑した。

「それに、オアシスで飲んだ水には、トカゲ族の伝統的な毒が混ざってんだ。俺たちには無害だが、うっかり旅人が飲んだりしたら、神経に作用して身体が動かなくなるって寸法さ。なあ、美味かったろ？ ええ？ なにしる、お犬様の好みに合わせて、俺たちの濃厚なシオンベンもたっぷり入ってたか

らな！」

「……下等種族の尿など、高貴なる我が聖犬族に効くものか！」

甘く見られたものだ、とシェリルは激昂を隠さなかった。

「そうかい？ なら、もつと強烈な汁をおみまいしてやろうか？」

首領は自分の腰布を脱ぎ捨て、爬虫類の生殖器をさらした。

幼いころから武芸に明け暮れ、男女のことに興味はなかったため、シェリルの性的知識は乏しい。

だが、雄のモノが、まさか二股に分かれていたとは……！

「驚いたか？ 俺たちの交尾は長くてな、交替で休ませるために二本のチンポが必要なんだよ。だから、マンコも肛門も、いっしょに掘りまくって悦ばせてやれるぜ？」

陵辱への期待が高まったのか、首領の二股ペニスは双子のキュウリのように膨れ上がり、青筋を浮かせてびんびんに反り返ってきた。勃起することで、体内から飛び出す仕組みなのだろうが、内臓を剥き出しにしたように赤黒く、篝火を反射して不気味に輝いている。

「さあ、謝るんだつたら今のうちだぜ。さんざんやられた仕返しに、きつちり犯すことは犯すが、少しくらいは手加減してやるからよ」

「誰が……！」

「へえ、そうかい？」

首領は下卑た笑いを浮かべた。

「おい、上がつてきな！」

命令を受けて、岩の下からリザードマンが何匹も這い上がっていた。下半身は剥き出しで、股間にぶら下がった二股ペニスを醜態に膨張させている。ぞつとする光景だ。

「くっ……殺せ！」

「ぶひゃひゃひゃつ！ それだよ！ そのセリフが聞きたかつたんだよ！ ざまあみろ！」

首領は復讐の快感に酔っていた。シェリルも口では殺せとは言ったものの、それは相手を油断させるため、本気で殺されるつもりはなかった。

だいたい、まだ負けたとは思っていない。この程度の危機は、戦場で幾度も経験していた。

相手はリザードマンだ。人がましく二足歩行しているが、本来は臆病で戦闘力も低く、しよせんはトカゲの魔物にすぎなかった。

ただ、その下級魔物の策略にハマられたことが猛烈に不愉快だった。

「ひひひっ、憧れの戦姫様を裸にひん剥いてやらあ！」

左右から這い寄ってきたリザードマンたちは、魅惑的に膨らんだ戦闘レオタードの胸元に手を伸ばした。

身体の起伏にびたりとフィットして、圧倒的なポリリウム感を誘示する乳袋を鋭い爪で裂こうと突き立てる。

「なんだ、この布はよ？ ぜんぜん破れねえぞ！」

あたりまえだ、とシェリルは侮蔑の笑みを浮かべた。

「おい、上がつてきな！」

生地は薄くても、精霊の加護を与えられた糸で織られている。魔族の攻撃を跳ね返し、物理的な防御力も高く、快適性は抜群だった。

「……いや、破れなくても、よく伸びるようだな。けけつ、じゃあこうしてやんぜ！」

右の脇下から爪で引っかけ、ぐいつと生地を力づくで胸の中心に寄せられた。柔軟性の高さが災いして、まろやかな白い肉球がたわみながらもハミ出ていく。

「いけそうだな。おい、そつちも同じようにやれよ」

「よきた！」

そんな手があったとは……！

シエリルは臍を噛んだものの、対抗する手段はなかった。

両サイドから生地を引っばられ、途中で乳首が引っかかり、ぼむつ、と右乳が弾みながら先に飛び出した。わずかに遅れてもう片方も勢いよくまろび出てしまう。

だが、トカゲ族ごときに見られても恥ずかしいとは思わない。相手を雄として見ていないからだ。しかし、抵抗もできず、いいようにされている屈辱感が腸を煮え立たせた。

「うははつ、すげえオッパイだ！もう唾液が止まらねえよ！」

暗色のレオタードと初雪のように真っ白な肌とのエロティックなコントラストが性獣たちを興奮させた。

トカゲ族の手が争いながら伸び、おぞましい愛撫がはじまった。

横たわつても形が崩れないほど張りつめた美乳が、ぎゅつ、と無礼な手に掴まれる。爬虫類は手は冷たく、その感触はねっとりしていて、触れられただけでも身震いするほど不快だった。

「……つ！」

おぞましさに耐えるため、シエリルは唇を噛みしめた。

指が白い柔肉に食い込み、餅のようになめまわし、揉みしだき、そのたびに戦姫の生乳をエロティックに歪ませていった。

「フワフワのモチモチだ。どこまでも指が沈みやがるぜ」

ぎゅううつ、と右の乳房を両手で搾られた。張りのある肉球が、さらにピンピンと張りつめて、青白い静脈を稲妻のように浮かび上がらせる。

その先端に、ピンク色の乳輪がふつくと盛り上がりつつある。トカゲ族の細長い舌が乳輪を這いまわる。ちろちろと舌先でくすぐっていく。その舌も二股に分かれ、初々しい野莓のような乳首に絡みついて卑猥にじごいてきた。

（……ううつ！）

ムズムズする異様な感覚に襲われ、背筋におぞげがはしるのを抑えられなかった。

桃色の乳首に穢らわしい唾液が塗りとくられ、ツヤツヤと光りはじめたところで、ぢゅううつ、と吸引された。

「んっ……！」

シエリルの肩が震えた。

刺激を受けたことで、戦姫の初心な乳首がぷっくりと膨張してきた。

胸の突起だけでは物足りなくなつたのか、左右のリザードマンは、美味しそうな柔肉の果実に齧りついた。

「うっ……くっ……！」

乳房にトカゲ族の歯が食い込み、鋭い痛みが胸元を襲った。その奥に鈍い快感が潜んでいることに、まだ彼女は気づいていなかった。

「おや、気持ちいいのか？」

首領は嘲笑した。

「下等な俺たちのテクニクで、高貴な殿下は淫乱な股間を濡れ濡れにしてんのか？ ええ？」

「ふざけるな！ 貴様らの行為が、ひたすらおぞましいだけだ！」

「けつ、その強がりがいつまでつづくか楽しみだな。二度と俺たちに逆らえないように、たつぷり調教させてもらうからな」

「だ、誰が……！」

戦場においてシエリル閣下ありと畏怖された自分だった。調教などされてたまるか、と啖呵を切りたかったが、怒りが激しすぎて、最後まで言葉にはならなかった。

「まあいいさ。おい、お姫さまのマンコの色をたしかめてやんな」

「待ってました！」

足元から這い寄っていたリザードマンが、戦闘レオタードの股下に手をかけた。構造はすぐにわかったのか、簡単にボタンが解除されてしまった。股間をカバーしていた布は、尻の谷間に沿ってぷっくりと左右に開いた。

日中に蒸れた汗の臭気とともに、まだ雄に触れられたことのない乙女のヴァギナがあらわになった。

濃密な恥毛に透けて、縦長のスリットが覗いている。饅頭をナイフで切つたみたいな肉厚の大陰唇が左右に割れ、固めのゼリーで造形したような小陰唇の扉がわずかにハミ出ている。不躰な指が、めち、と花弁を開いた。

汗と他の体液でヌメヌメと輝く鮮やかな朱色の粘膜が、リザードマンの網膜を射貫いた。

「ボス、大当たりだ！ 膜が残つてやがる！ まったく使い込んでない新品ですぜ！」

「くくつ、いいねえ」

「貴様ら……心を入れ替えて、私を解放するのなら、今のうちだ。さもなければ、トカゲ族など一匹残らず駆逐してくれるぞ！」

シエリルは居丈高に吠えたが、返ってきたのは嘲笑だった。

「まだ自分の立場がわかってないようだな？ おまえはオッパイと尻がでかいだけで、ガキのように行儀の悪い雌犬なんだよ！」

黄金色の前髪を鷲掴みにされ、力任せに引っばられた。頭皮に痛みがはし

り、顔をしかめたシエルの上半身が無理やり引き起こされていく。

そのとき、彼女は見てしまった。

下にも篝火が盛大に焚かれ、巨岩は無数のリザードマンがとり囲んでいる光景をはつきりと照らしていた。彼らは平伏していた。いや、先祖返りしたように四つん這いになっていく。これから邪教の儀式でもはじまるかのよう

に異様なほどギラギラした——全員が狂信者の眼をしていた。

(生け贄……!)

初めてシエリルは、わずかに心が怯むを感じた。

「おらっ、犬っころは犬っころらしく四つん這いになりな！」

シエリルは荒っぽく前方へと突き飛ばされた。両腕は縛られているから受け身をとることもできない。顔をぶ

つけないように肩で衝撃を吸収し、二つの爆乳も岩肌で弾んでクッションの役目を果たしてくれた。

「まったく、生意気な尻だせ！」

ばしっ、と快音が響いた。

さっきまで乳首をしゃぶっていたリザードマンが、叩いてくださいとおね

だりするように高々と掲げられたデカ尻を手のひらで叩いたのだ。

ジン、と表皮が痺れた。

「よし、こつちも一発! いや、二発! いやいや、もつとだ!」

調子に乗って、左右から交互に尻肉

をスパンキングされた。

連続して尻肉が鳴らされた。

(ぐっ……うっ……!)

悲鳴こそ上げなかったが、手首のヌップが利いた平手打ちの嵐は彼女の脳天まで鋭く響いた。

戦場での負傷には慣れていたが、皮膚の表面を襲う痛みではアドレナリン

の分泌が間に合わない。

ぷりっとした美尻がジンジンと痺れ

熱を帯びて火照ってきた。トカゲの手

形が、くつきりと赤く刻まれているか

もしれない。

意識しなくても、肉体のほうが痛み

に備え、ぎゅっ、と勝手に琥珀色のア

ヌスを収縮させてしまう。

しかも、子供にお仕置きをするよう

なスタイルを強要され、目尻に悔し涙

が滲んだ。

(くっ、身体さえ自由になれば!)

戦姫には耐えられない屈辱を晴らす

ことはできなかったが、今はひたすら

復讐の怒りを凝縮させた。

「ははっ、さすがに四つん這いが似合

ってるな、シエリル閣下。さて、お次は、

やつぱり犬らしくオシャブリしてもら

おうか?」

鋭利な爪の生えたトカゲ族の両手で、

シエリルの凛々しい顔はがっちりとか

まれた。正面を向くように持ち上げら

れ、両肩が浮き、乳房が岩肌から離れ

ていく。

首領は腰を突き出し、二股ベニスを

近づけてきた。

生臭く、赤黒く、奇妙なほど艶やか

な表面に無数のイボがびっしりと並び、

眼をそむけたくなるほどグロテスクな

形状をしている。

「どつちがいい? どつちも美味そう

で涎が出るか? だったら……ふん

っ!」

首領が妙な気合いを入れると、ぎゅ

るっ、と二股ベニスは螺旋状に絡みあ

って一本のドリルとなった。

シエリルは驚きで眼を剥く。

「どうだい?」

首領はドヤ顔だ。

禍々しい肉ドリルが、花びらのよう

な唇に押しつけられる。ひんやりした

トカゲ族の身体は、そこだけ熱く火照

っている。表面はゴムを張ったように

弾力があり、なにかの粘液でべつとり

と濡れていた。

(誰が唾えるものか!)

こんな穢らわしいものは誇りにかけ

ても口に含むわけにはいかない。必死

に抵抗を試みたが、鼻をつままれ、息

が苦しくなつて少し口を開いたところ

で、ぐにゅり、と生臭い肉棒が隙間か

ら滑り込んできた。

反射的にえずきそうなほど気持ちの

悪い感触で、ドブに舌を突っ込んだよ

うなひどい味だった。

「下等なトカゲのチンポ味はどうだ?

美味いか? ええ? 犬族のフニヤチ

ンとどつちが美味いんだ? ほれ、も

つと丁寧に味わえよ!」

屈辱的な体位で、トカゲ族の猥褻な

器官を含まされていても、まだ女戦士

の心は折れていなかった。

(嘔み切つてやる!)

きりっ、と柳眉を逆立て、渾身の力

を顎に込めた。

だが、鋼鉄のような硬度に歯が悲鳴

を上げた。

(……な、なぜだ!)

シエリルは愕然とした。

「はははっ! 俺たちのチンポはな、

犬族みたいにフニヤフニヤじゃねえん

だよ。しかし、ご主人様に嘔みつくよ

うじゃ……キツイ躰が必要だなあ」

ぎゅっ、と両耳を掴まれた。

「……っ!」

バカ力で握られたせいで、千切れそ

うなほどの激痛がはしった。

聖犬族にとつて、耳は大事な部分だ。

触れただけで、決闘騒ぎになつても不

思議ではないのだ。

(は、放せ!)

怒声を放ちたかったが、醜悪なベニ

スで口を封じられていては、うなるよ

うな声しか出せなかつた。

「さあ、そのお上品な舌で、ご主人様

の味を覚えるんだよ!」

両手でシエリルの頭を固定して、首

領は乱暴に腰をふたつた。

「……っ……っ……んぐっ!」

火傷しそうなほど熱く、みずから粘

液を分泌しているようにヌルヌルした

肉棒が舌の上を這いまわり、戦姫の口

腔が蹂躪されてしまった。味わいたく

なくても、穢らわしい汁が唾液とともに

に喉まで流れてくる。じゅぽっ、じゅ

ぽっ、と両耳を掴まれた。

「……っ!」

バカ力で握られたせいで、千切れそ

うなほどの激痛がはしった。

聖犬族にとつて、耳は大事な部分だ。

触れただけで、決闘騒ぎになつても不

思議ではないのだ。

(は、放せ!)

怒声を放ちたかったが、醜悪なベニ

スで口を封じられていては、うなるよ

うな声しか出せなかつた。

「さあ、そのお上品な舌で、ご主人様





龍虎相打つ川中島!
秘策によって思わぬ事態に!?

ぐぬぬぬ!!
おのれい
うえすぎけんしん
上杉謙信め!

なあせ奴に
勝てぬのだ!!

雌雄決着?

川中島合戦異聞録

漫画 COMIC

ぱふえ

武田信玄



ゴニョゴニョ
ふむ!
なるほど



いいえ!
策がござり
ますれば
では我々に
何の手だても
ないまま
引き分け
続けるか
言うのか



奴には
毘沙門天の
加護があり
ますゆえ
おおおう
勧助!



今日こそ
雌雄を決し
ようぞ！
武田信玄！！

上杉謙信

望む
と……やめ！

ぬうりやあ
ああああ！！

モーン



な……ッ

こ……ッ



ならば！



うぬう！
さすがは
謙信！

一筋縄では
いかぬか



ははッ

何のつもりだ
信玄公！

ぬ？
胸が……
苦しい？

帯がきつく
なつたか？
まあよい

まやかしの
つもりか！？

ククク……
貴様に神仏の
力があるなら

こちらは
呪いの力よ

何を言っ
ている？

問答無用
だ！



今日は体が
軽いな！

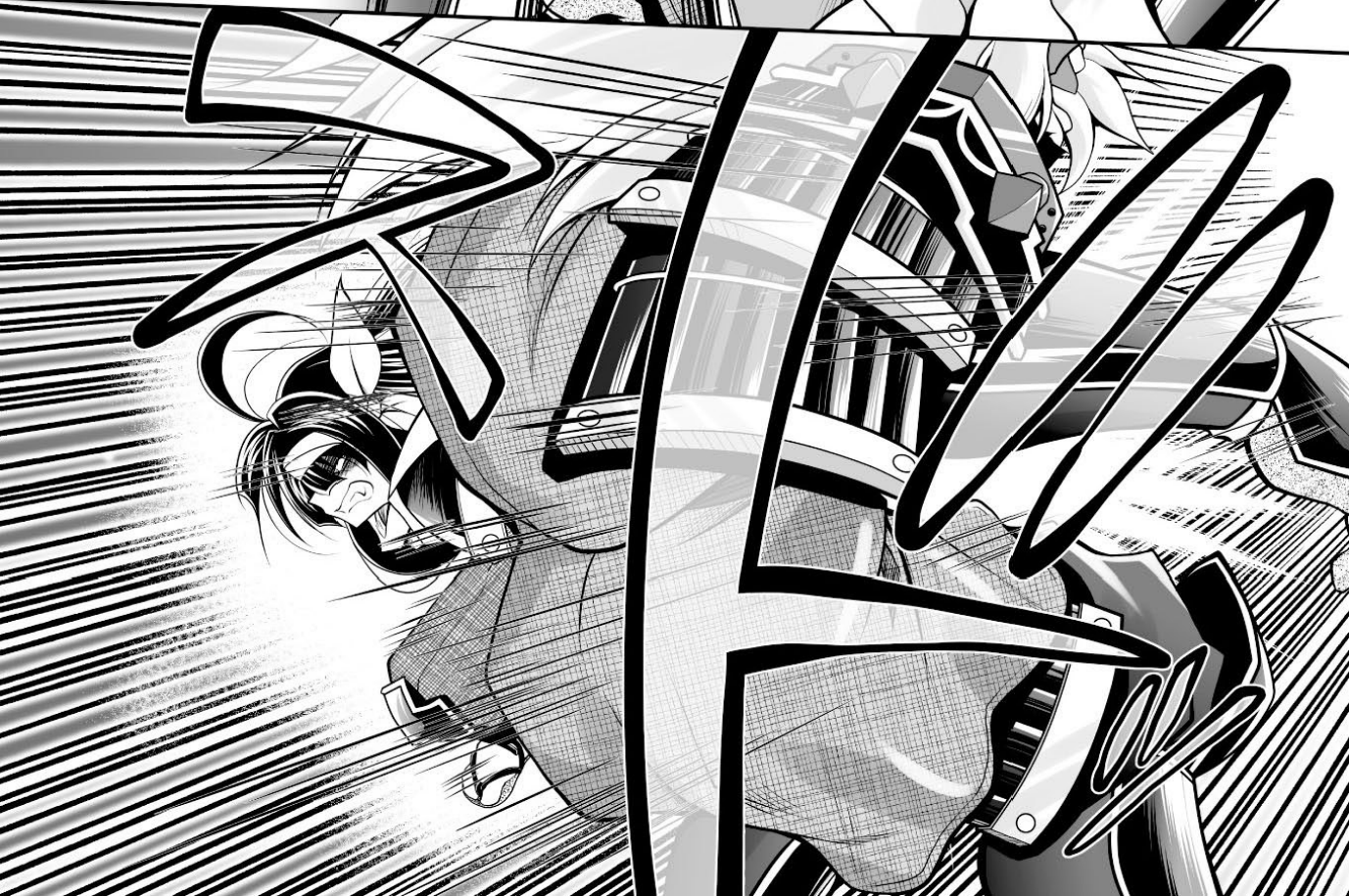
ぬおおお
おおっ!!

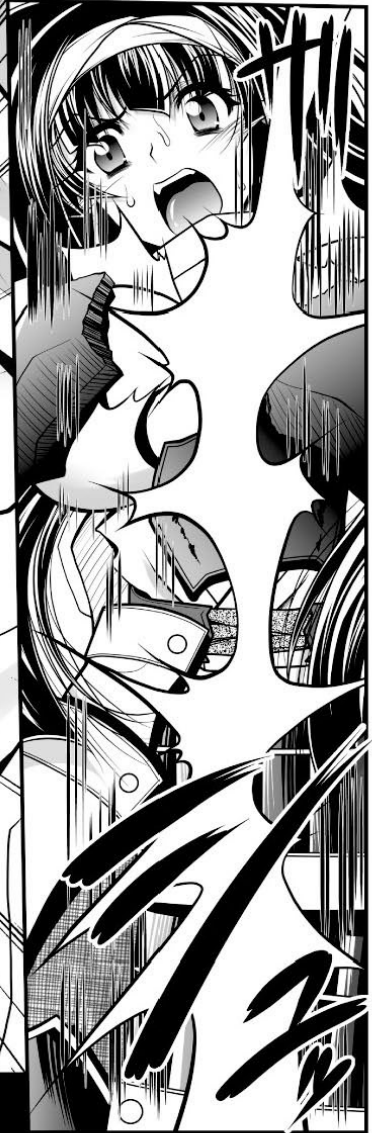
速い！
くそ！

武田
信玄！

どうだ！
私の動きを
見切れまい

覚悟——
!!





え…?



ぐええ

く...うえ
男の精とは

なんと
いう
匂いだ...
目眩がする、

こんなに...
臭い...のか

一息ついでる
暇などないぞ

まわわ

だがなんだ?
この匂いを
嗅ぐと
切なくなる!?

な!? え!?
まさか?
そんな!?

立ち直る暇
を与えず
墮として
くれるわ

男の私を
犯すなん...

疾きこと
風の如く

侵略すること
火の如しよ!!



櫛笏齋流島

～恥辱の燕返し～

小説
NOVEL

ざかい ひとし
酒井仁

挿絵
ILLUSTRATION

ゆすみ
雪墨

謀られた美しき秘剣使い
女体化の秘術に散る——!?



歴史上、その男は最も有名な「劍聖」とされる。姓は宮本、名は武蔵。

「三天一流兵法」の開祖にして、六〇以上に及ぶ決闘においてただの一度も敗北したことがないとされる。

武蔵の養子である宮本伊織が記した「小倉碑文」によれば、京の兵法家吉岡一門門下生七〇人と斬り結び、これを見事退けた。

劍の腕のみならず書画にも秀でた芸術家でもあり、後に「五輪の書」を著す「文武両道」の人でもあった。

しかしながら、「小倉碑文」には脚色と思しき箇所も多く、同時代の他の資料と食い違う部分も多々存在する。

また、後世の創作によって事実と虚構の境目が曖昧となり、実際の武蔵像を確定することは難しい。

だが、武蔵の名をひとときわ世に知らしめたのは、他ならぬ「巖流島の戦い」であることに異を唱える者はないであろう。

時に慶長十七年（一六一二年）四月十三日。

小倉と下関の間にある船島——後に巖流島と呼ばれるようになる小島である。この島を領していた細川藩の剣術師範・佐々木小次郎と、宮本武蔵の決闘が執り行われようとしていた。

「遅い……」

船島にてただ一人、武蔵を待つ男は苦虫を噛み潰したような顔で、そう独りごちた。

決闘の開始時刻は辰の刻、今でいう午前七時と取り決めていたはず。にもかかわらず武蔵の姿未だなく、既に三時間が経過していた。

「彼奴め、臆したか。それともこちらを苛立たせる姑息な目論見か」

憎々しげに語るその髪には白いものが混じっている。諸説あるものの、このとき武蔵二十九歳、小次郎は五〇代とも六〇代とも言われている。

若き頃は黒い髪を垂らした白皙の美青年だったとも伝えられるが、齢を重ねた今は剣豪らしい風格を備えた面構えとなっている。

深く彫り刻まれた皺と厳しい眼差しは、長年の鍛錬の証。佐々木もまた剣に生きてきた劍豪。その背中には刃渡り三尺を優に超えようかという恐ろしく長い劍があった。

小次郎はこの長尺刀を用いた「秘劍・燕返し」なる技で「巖流」を打ちたてたとされる。

と——取り決めの時刻より実に三時間が経過した頃、波間によく船影が浮かんだ。小舟の舳先がしりとした体格の男が一人。片手には舟の櫂とも木刀ともつかぬ木の棒が握られている。

「待ちかねたぞ武蔵！ 臆病風に吹かれたかと思うたわ」

あちこちすりきれた黒の着物、額には鉢金付きの鉢巻き。腰に刀はさしているものの、男は右手に持った巨大な木刀で戦うつもりようだ。

初めて相対する男の気迫に、小次郎の闘争心もまた膨れ上がる。

噂には尾ひれが付きまとうもの。

宮本武蔵なる男が京の吉岡一門を一蹴したなど到底信じられぬ戯言と思っていたが、目の前の男は確かに只者ではない。

（こやつ、できる）

だが、負ける気はしない。齢を数えているとはいえ小次郎の肩と胸は武蔵と同じほどに太く厚く、己の劍の刃えはいささかも衰えてはいない。

「いざ、尋常に勝負——」

武蔵が木刀を最上段に構えると、小次郎も長刀を正眼に構える。そこから繰り出される「燕返し」を

避けた者は未だかつていない。

波音が響く浜辺に緊張が走る。

武蔵に動く気配はない。が、殺気が高まつていくのを小次郎は肌で感じていた。

先に仕掛けたのは小次郎。「物干し竿」と呼ばれる長劍の劍先が音もなく沈み、急なる弧を描いて跳ね上がる。小次郎は既に武蔵に向かって踏み出しており、三尺の刃は一瞬で武蔵の額に吸い込まれる。

「ぬうつっ！」

がきいいんつつつ。

人を斬るのとは違う手応えに、小次郎の顔が歪む。そして次の瞬間、彼は目の前に迫る木刀に目を見開いた。

そして知る——武蔵は、この豪胆なる男は最初から己の秘劍を避けるつもりなどなかったのだ。額の鉢金はおそらく特別製。通常より厚く硬いそれで最初の一撃を受け、懐に飛び込んできた小次郎の額に迷いのない木刀の一撃を撃ち込んだのだ。

ぐら……どさりっ。

一瞬、小次郎の体が傾いだかと思うと、砂浜に倒れ伏す。額からは血が一筋、佐々木小次郎は意識を失っていた。

2

「う…………」

ずきずきという痛みと共に、小次郎は目を覚ました。どうやらまだ生きてるようだ。あの巨大な木刀の一撃をくらったのだ、脳天を割られて絶命していてもおかしくはなかった。

（だが、其が武蔵に敗北したのは間違いない……）

「気がついたか、佐々木小次郎」

野太い声が頭上から浴びせられる。右手に例の木刀を持ったいかつい男が小次郎を見下ろしていた。

殺気は——ない。だが、なぜか宿敵を見る眼差しではなく、小次郎は不気味さを感じずにはいられ

なかった。

「なんだ？ 其の着物が大きくなってきているような」

「俺は、将来兵法の指南書を書こうと思っておる」
なにを言い出すのか、武蔵は唐突にそんなことを語り始めた。

「古今東西、天地万象に通じる究極の兵法よ。名付けて『六輪の書』。地・水・火・風・空……そして色の六書をもって完成させるつもりだ」

ふむ、と小次郎は少し感心した顔をする。

「どうやらただ腕っ節の強い猪武者というわけでも無さそうだが、なぜ自分にそんなことを語るのか。」

「特に——『色』に関しては南蛮渡来の秘薬に関する薬物の書とするつもりだ。中には驚くような知識もあつてな、目下はそれを試しているところよ」

「なっ……其に一服持ったのでは……ある、まい……なにっ!？」

己の喉から発せられた甲高い声に、小次郎は驚愕した。誰がどう聞いても齢六〇近い老人の声ではない。若い娘のそれだったからだ。

ハッと手を見つめると指は白く細長く、長い年月の末に岩のように節くれだつた刀ダコが綺麗さっぱり消えさせている。驚きに言葉を失う小次郎の首筋を、黒くて長いものがさらりと撫でる。

「其の髪の毛が、こんなにも黒く長い……?」

「貴様ッ。武蔵、いったい何をしたッ」

「そのように愛らしい顔で凄まじくも怖くもなんともないぞ。いやむしろ気の強い小娘というのは、これはこれでそそのものがある」

「小娘……だど?」

大きくなった着物の胸元から、乳房が覗いて見える。いや、着物が大きくなったのではない、小次郎の体が小娘の体になり果てていたのだ。

頬を触ってみても、すべすべと皺ひとつもない若い女の肌そのものだ。きゅつとくびれた腰、豊かな

乳房、平均よりは長身のようなだが、がっしりした武蔵に比べると細身に華奢な娘だ。

「ほ、本当に其は女になってしまったと言うのか、そんな面妖なことが」

何十年と剣一筋に打ち込んできた、巖流佐々木小次郎ともあろう者が、果たし合いに敗れたばかりかこのような辱めを受けるとは。

愕然とする小次郎だが、彼の、いや彼女の身に起こる不幸はこれが始まりにすぎなかったのだ。

「ふむ、半刻を経てなお元に戻る様子もなし、かもう少し確かめてみる必要があるろう」

「こ、この上なにをするつもりだっ」

知れたこと、と武蔵の手が小次郎の襟元を掴んだと思うと、次の瞬間襟元が大きくはだけられ、小次郎は砂浜に倒れ込んでしまう。

「うむ、貴公は……いや、そなたはなかなかの巨乳であることよな。乳首の色など見るに、まだ男の手を知らぬ生娘のそれだな」

「ななっ」

事ここに至つて、小次郎は目の前の巨漢が自分好色の目を向けていると知り、唾然とする。

小次郎とて齢六〇、それなりに女も抱き、衆道の経験もあつた。だが自らが女体となり、むくつけき男に抱かれるとあつては話は別である。

「そ、それ以上近寄るな痴れ者めッ」
「ふふ、何もいきなり力づくで初モノを破ろうなどと乱暴なことは考えておらぬ。まずは本当に完全な女性の肉体になつたか、隅々まで確認しなければな」

「あ、あ……」

元剣豪と言つても今はかよわい女の細腕。袴を剥ぎ取られ、前をはだけられてしまう。厚い武蔵の手が形のいい乳房を揉みしだき、果実のように引き締まった尻を撫でまわされると、小次郎はびくびくと身を震わせた。

3
「くっ、まるで敵わぬ……!」

今この場で舌を噛んで自害しようかとも思ったが、そうすれば後に残されるのはどこの誰とも知らぬ女の死骸だけ。ここはなんとしても生き延びて、その秘薬とやらで元に戻ることを考えるべき。

だが、武蔵の太い指が自分の尻の割れ目をまさぐつてくると、ぞわぞわと悪寒が——いや、紛れもない快感が小次郎の体を貫いたのだ。

「お主とて衆道の心得くらいはあろう。いきなり女陰を貫かれるより、こちらを弄られる方が感じるのではないか?」

「くっ、ひや、ひやめ……っ」

この時代、衆道というのは決して変態的背徳的な行為ではない。

儒教の根付かなかつたこの国においてはむしろ正常な欲望処理の方法であり、戦国武将はお稚児を戦場に連れ、これを愛でていたと言う。

無論、それは武蔵や小次郎においても例外ではなかった。

「ほう、なかなか初い反応をするではないか、佐々木小次郎。そのような甘い声で鳴かれると、我が愚息もつい反応してしまいそうだな」

「い、いや、だ……こんなの、は……いやだあつ」
武蔵は小次郎を四つん這いにすると、尻の割れ目の奥を指先でぐいぐいとまさぐつてきた。

きゅつとすぼまったアヌスを指の腹で擦りあげられると、それだけで背筋を快感が走り、愉悅の声が漏れてしまう。漏れ出る声を抑えられない。

「うむ、締まりはいいがなかなかのほぐれ具合。これなら我が愚息も簡単に呑みこんでしまいそうだな」
（この巖流ともあろうものが、よがらされ……っ）
自分で自分の反応が信じられない。

だが今の小次郎は非力な小娘。男の腕力に敵う道

理もない。ただ尻穴を弄られ、尻を高く上げた格好で悶えよがることしかできないでいたのだ。

「はあ、はあ、はあ……んっ」

裏門への執拗な刺激にいい加減ぐったりとなった頃、武蔵の動きが変わった。

するりと帯をほどくような音がしたかと思うと、太い指が小次郎の——少女の尻肉をぐいと押し広げたのだ。

「ひっ?」

丸出しにされたアヌスが外気に触れてひくつく。

そこに「ごりりっ」と硬く熱い拳のようなものがあてがわれたかと思うと、次の瞬間、少女の尻穴に硬く屹立したものがねじ込まれていたのだ。

「くあああつ! やめろつ、やめ、ふああつ!!」

黒髪の美少女は背中を反らせ、細く白い首をのけぞらせて悲鳴を上げた。否——それは悲鳴ではなく、明らかに快美を示すものだ。

(む、武蔵のマラが其の中に……!)

ぬちゅ、ずちゅつ、にゅぶぶぶつ。

「ひっ、ひぐ、ぐうう……つ!」

屈辱を感じていないわけではない。

だがそれと肉体に対する刺激への反応はまったく別物。少女がどれほどに武蔵を憎もうと、深々と突き入れられた肉棒は少女にこの上ない快感をもたらしていた。

「むう、これはいい尻だ。食欲に我がマラをくわえこんでゆくわ!」

「ぐ、ううう………つ」

少女は唇を噛みしめ、手で口を塞いで愉悅の音が漏れぬよう必死にこらえる。しかし武蔵が二度三度、腰を大きくグラインドさせて直腸の奥をえぐると、どうしたって甘く切ない声が漏れてしまう。

(女の体にされたばかりか、尻で、尻穴でよがらされてしまう!)

げに恐ろしきはこの武蔵という男の底知れぬほどの食欲さである。

この男が求めているものは強さだけではない。南蛮の秘薬にまで手を伸ばす知識欲、将来を見据えた展望、そしてたとえ相手が元男であろうと、目の前の美少女の肉体を食らさずにはいられない、たぎるような欲望の権化。

それが、宮本武蔵という男であった。(だが、其にも意地がある! こんな下劣な男になど屈してたまるものか!)

たとえ女に身をやつそうとも、小次郎とて剣豪と呼ばれた男。このままイカされることだけはなると、必死に意識を尻穴からそらす。

「さすがは巖流、そう易々と墮ちはせぬか」武蔵の声の調子が変わったことに小次郎は気付く。ぐっふつふと嗜虐的な悦びにまみれた声だ。

「ならばいいよ、その初物貰い受けようぞ」
「な、なにを……きゃああんっ」
やおら体をひっくり返されたのもそうだが、自分の口から愛くるしい少女の音が漏れ出たのがショックだった。

いまや小次郎はどこから見ても、つややかな黒髪を垂らした美少女であり、この甘やかな香りが己の体臭であることにさえ衝撃を受けていた。

(恐るべし、南蛮の秘薬……)

武蔵はあっさり少女を仰向けにしてしまう。そうして恐ろしい膂力で少女の股を大きく広げると、下肢の付け根に顔を押し付けてきた。ぬるりと生温かい舌が少女の秘裂をねぶりあげ、生まれて初めて女陰を舐められる感覚に、少女は目を見開かずにはいられない。

(こ、これが女の体、これが女子が感じる快楽だと言うのか? なんと……)

れるれる……ぴちゃぴちゃという湿った音に、いつしか少女の甘い声が混じり始める。

「ん、ふううつ。許さぬ、ゆるさぬぞ武蔵い」

「うむう、なんと芳しき処女の股ぐらよ。これは紛れもなく生娘の香り。我ながら己の調査した秘薬の効果空恐ろしいわ」

どのくらいの間、花卉をねぶられ続けていたのだろうか。股間はぐっしり濡れていたが、それは武蔵の唾液だけではない。

他ならぬ少女自身の体内深くからも、熱い蜜が後から後から溢れ続けている。武蔵も、そして小次郎自身もそれがわかつていくだけに、黒髪の美少女は怒りの目を武蔵に向けた。

「貴様、同じ剣の道を歩む武士に向かって、恥ずかしくはないのか!」

だがそんな小次郎の矜持を巨漢はせせら笑う。「今のお主はただのあどけなき小娘に過ぎぬ。せつかく女になったのだ、その身が味わうありとあらゆる悦楽を知つてみたいとは思わぬか?」

そう言つて少女の股間から顔を上げた武蔵の口元が、てらてらと光っている。そのぬるぬるした液体が、少女の秘唇から分泌された体液であるのは考えるまでもない。

(其が……この男に股ぐらをねぶられて、濡らしているというのか……)

その顔に絶望を見てとつたか、武蔵の笑みがいつそう獐猛なものになる。

無精髭周りを舌なめずりでれろりと舐め取ると、腰を突き出して股間のイチモツを見せつけてきたのだ。先ほどまで自分の尻穴を掘削していた肉槍の、醜悪なまでの迫力に、少女は息を飲む。

(あれが……あんな大きなものが其の尻に)

その先端は黒光りして、まるで金属のごとし。亀頭の周辺がめりりと傘が逆立っていて、その部

へってめえが噂の
キッド様か…

女みてえに小さい
って話だったか

まんま
女じゃねーか

うるせー
こっちだっけなりたくて
女になった訳じゃねー

はじめるぞ
1 2 3

7
8

4
5 6

漫画 ゆたかめ

ビリーガッド

穢れた英雄

卑怯者…

騙される方が
悪いんだよ





あつ
まで「フ」ッ

全くついてないぜ…
こんなシケた決闘
なんてよ…



へっ 楽しみに
してるぜ

貴様には
偉大なスピリットの
鼓ぎが下るだろう

あのインディアン
のせいでこんな事に
なっちまって…

町まで歩くしかねーか
クソ…どれもこれも
あのインディアンが…



あづ…
びっ…

体が…うっ…



てめえは
とっとと死ねっ

そのスピリットとやらを
ベッドで待っててやるよ



ないっ!?

なんで胸が!?
えっチコもっ?!



あぁあぁあぁ
何じゃこりゃ

ちよ…
ちよ…と待て…



あそんでこーぜ
ねーちゃん

女も抱けねえし
イザコザ増えるわ
とんだ呪いだぜ…

はあっ…

酒でも飲んで
忘れよう

グッ

マスター
ビールをくれ!!

じやま
するぜっ

はいよ

カウンター下の
銃も下ろしな—

ハチの巣に
なりたくなければな

Shit

おいおいマスター
何のまねだよ?

キーン



そーいう事か
ギャレット…

久しぶりだな
キッド

こーいう事だ
ビリー



よう旦那ら平和的に
いこうじゃねーか

な？



てめえら
ただじゃ済ま
…

あう



おらっ
とつとつ
入れよう!!

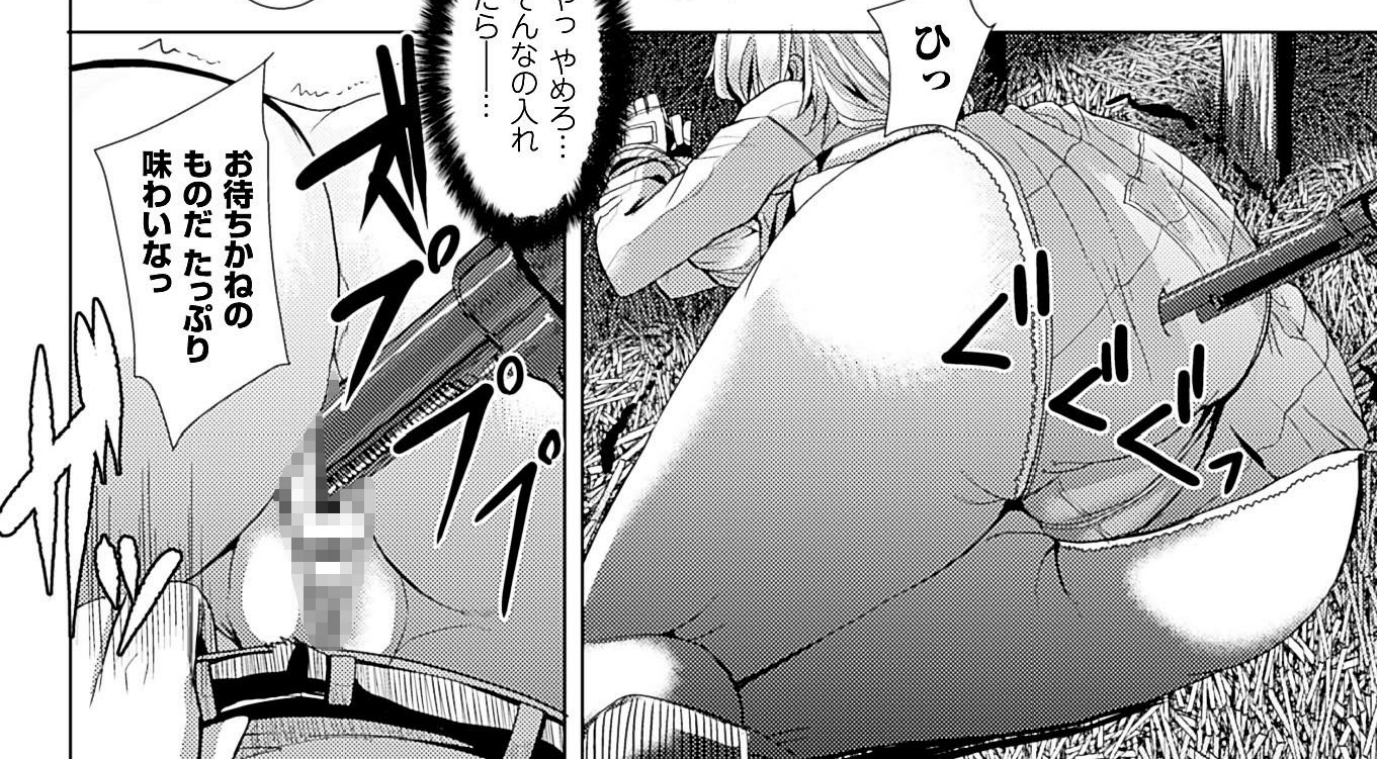
ら



せつかくこんないい女
なあ保安官さんよ
……いいだろ?

ああたっぶり
可愛がってくれ

うひひ…何て
エロいケツだ…



やっやめろ…
そんなの入れ
たら…!

ひっ

お待ちかねの
ものだっぶり
味わいなっ

ぐっ
クソッ

グッ
グッ

何でこんなのが
気持ちいいんだよ

こいつ銃で
感じてやがるぜ
とんでもねえビッチだ

ズッ

んひっ

だめだっ 止まれねえ
やめろ やめてくれっ

キキ

やめっ

おっと銃も
そろそろイきたい
みたいだぜ？

グッ
グッ

違っ俺っ

はあ♥

ぬ
ぬ
ぬ
ぬ

うわっきたねえ
小便ぶっかけやがった！

高貴なる魔女 クラウゼア

淫墮の異端審問

第三話 悪魔審問 二回目

護国の魔女が墮ちるまで、
淫猥なる悪魔審問は続く



好評発売中!

おおくまたぬき
小説 NOVEL 大熊狸喜

挿絵 ILLUSTRATION しゅんぞう

翌日。

クラウゼアに対する審問は、陽が傾いてから再開された。

日中に再開しなかった理由は、王国側にとって、審問も民衆に与える娯楽の一つだからである。

貧しい小国でしかないカライルーズのような国には、遊興そのものが殆ど無い。

小さな収穫祭がやつとの民衆にとつて、審問や死刑執行すらも、辛くて貧しい日常を忘れさせてくれるという現実もあった。

また、刺激的なイベントとして公開する事で、王族の正当性の主張や、国に対する不満のガス抜きという側面もあるのだ。

東の空が群青色に染まる頃、仕事を終えた人々が取り囲む広場の壇上で、ギョー司祭が宣言をする。

「それでは、魔女クラウゼアに対する悪魔審問を再開します。今宵の審問により真実を明らかにし、クラウゼアが悪魔との契約を破棄し、立ち直り、我らの側に立ち戻らん事を」

審問と言いつつ、クラウゼアは既に悪魔と通じていると、巧みに断言をしていた。

壇上には昨日と同じく、神教の装束を纏ったグルーク王子が座し、側にはギラつく眼孔の小男ガギロギア宰相。

司祭の後ろには、神教の修行の身を示す白いローブを纏った少年が二人、控えている。

審問の警備の為か、騎士団長のヤンと、やけに大柄な騎士たちが周囲を固めていた。

騎士団はヤンを含めて、みな神教の白鎧を装着。テリイボル神教の武装教徒団に首輪を掴まれたクラウゼアが、壇上へと連れられる。

「み、見ろっ、あの恰好……っ！」
その姿に、人々は何の違和感も無く、先日の審問での、魔女の罪を確信させられていた。

首輪のクラウゼアが身に着けているのは、いつも和風ビスチェではない。

(み、みなさんの、視線が……！)
罎の広い三角帽子を頭に乗せているものの、肢体を飾っているのは、面積の小さな艶めく黒皮のビキニ。

白くて艶々の爆乳は、小さな面積にキツく詰め込まれていて、左右の外乳では細い紐を食い込ませて

いる。
ただでさえ深い胸の谷間は、ビスチェの時よりも更に深く柔らかく寄せられていて、男性だけでなく女性の好奇な視線も、惹き付けて止まない。

剥き出しのウエストは絞られたように細く、階段を上るに従って柔らかくくねり、縦長の臍も完全に露出。

対してなだらかに広がる女腰は、ハイレグで極小さな黒皮のボトムだけで覆われている。

腰の左右は細い紐を皮下脂肪に食い込ませていて、引き締まった下腹部が恥丘まで露出。

小さな黒皮の表面には、薄く割れスジが浮き出ている。大きく丸いヒップはほぼ剥き出しで、谷間の上端だけを、極小の逆三角が隠していた。

黒い帽子と黒皮のビキニ。このスタイルは。
「こっ、この女だあつ！ あの時オレを襲った、レイブ魔女だあつ！」

昨日と同じ瘦せた被害者の男が、広場全体に響くような大声で告げる。

「レイブ……ハッ!?」

今朝、着せられていたこの衣装については、何の知識も無かった。しかし今の男の言葉で解る。

自分が着せられているこのビキニは、先週この町で起こっていたと言う、男性たちに対するレイブ事件の犯人が着ていたビキニだろう。

つまり自分は、その犯人として意図的に濡れ衣を着せられている。という事だ。

「ち、違いますっ……この衣装は、今朝っ……うくうっ！」

身の潔白を告げようとした魔女の口が、ギョー司祭の大きな掌で塞がれる。

「審問の場で、許していない発言は、してはなりません」
冷静で優しい口調ながら、掌の力は異様に強い。そんな司祭の掌からはホンノリと、男性の精液と同じ、カビにも似た腐臭が漂っていた。
「んんっ——んんん……っ！」
(この匂いは……ああ……！)
嗅がされた途端、昨夜の影響もあつてか、魔女の肉体が胎内からの性熱で、ジックリと炙られ始めてしまう。

昨日の審問の後、クラウゼアは王城の地下で、軽蔑するグルーク王子に一晚中犯され続けた。

魔法を封じられた肉体のまま、ベッドの上に全裸で転がされて、手足を開いた姿勢で拘束。

妊娠の秘薬を特濃で吞まされ、グルークによる強姦中出しと強烈な絶頂を、何度も何度も体験をさせられた。

一晚中、鼻腔を刺激され続けた、男性の精液臭。
(こんなっ、臭い……いやあ……っ！)
嗅がされているだけで、胎内が飢餓感に目覚めさせられてしまい、心臓がトクトクと高鳴ってゆく。

強姦責めから解放されたのは、東の空が明るくなるから。

疲弊しきつたクラウゼアは泥のように眠らされ、目が覚めると、この衣装を着せられていたのだ。

こんな露出狂のようなビキニを着せられて人前に立つなんて、普段から一人で森に住んでいる魔女には、それだけで羞恥が強過ぎて混乱しそうだ。

更に魔女が恐怖し焦燥しているのは、昨夜の

し強姦での王子の精液で、未だ胎内が満たされてしまっている現実だった。

私の胎内で、王子の精液が生きている――。

妊娠ポーシオンを吞まされた女体は、秘薬の力で妊娠に最適な子宮へと調整されている。

しかもグルークに吞まされた秘薬は、胎内に吐き出された精液を生かし続けるだけではない。

魔女が一度でも妊娠をすると、その後も一生妊娠をさせられ続けるという、女性にとつては悪夢と絶望でしかない秘薬だ。

(あ、あのような男性の子供なんて……！)

まだ妊娠していないとはいえ、魔力を奪われて子を産み続ける続けるなんて、死にも勝る絶望。

自身の運命に抗う方法を模索する魔女の両手が、教徒団たちの掌で、昨日と同じく棗に繋がる。

黒皮のピキニに飾られた魔女の肢体がX字で拘束されると、その肌にも男たちの劣情溢れる視線が、絡みついてきた。

「見ろよ、あのエロい身体ときたら！」

「乳のかさなんて堪んねーぜ！」

「しかもあの艶はどうだ！」

母譲りで元から白くて艶々だった、クラウゼアの滑らかな肌。

シミ一つ無いツルツルの美肌はしかし、男を教えられて性交での性絶頂を教えられて、更に胎内で精液を吞まされた事で、女として艶めかしい開花を始めてもいた。

魔女の身体が官能にトロけ始めたことと理解したギー司祭の掌から、唇が漸く解放される。

深く息を吸ったクラウゼアの口からつい溢れたのは、しかし疑惑を否定する言葉ではなく、強い羞恥の告白だった。

「ああ……そんなに見ないで……ください……っ！」

処女の頃の清潔な肌艶に、性感を知ってしつとり

と牡を誘う様な、しなやかな艶が含まれている。

全身のシルエットも堅さが抜けて、女性特有な柔らかさを無自覚に発揮。

クラウゼア自身も気づいていないけど、乳房と腰が僅かに実りを増して、細いお腹の皮下脂肪も微妙に上乘せされている。

たった一晩男を教えられただけで、クラウゼアの肢体は男にとつてより最上な、恋人だったら何度抱いてもまた欲情させられる程の官能性を、魅せ付けていた。

再開された悪魔審問。司祭はいつも通りの冷静な口調で、魔女に問う。

「クラウゼアよ。今すぐ悪魔との契約を破棄すると誓い、我がテリイボルの神に懺悔をし、許しと救いを請うのです」

既に悪魔信者と断定し、その上で許しを請え、と言っている。

そんな言葉、頷くわけには行かない。

「私は、悪魔と通じてなどおりません……っ！」

司祭の目を真っ直ぐに見ながら、真剣に告げるピキニの魔女。

嗅がされた精液臭の影響で胎内がじつくりと熱を上げて、白い肌には霧状の汗がキラキラと反射され始めている。

「やむを得ません。これへ」

魔女の返答を十分に予測していた冷徹な司祭が、背後で控える修行者に命じて、新たな尋問道具を用意させた。

司祭を完全に信じ切っている若い神父見習いが、二人、液体の入ったボウルを手にして魔女の前へ。

まだ年若い少年たちは、神の救いの手伝いだと思ながらも、目の前と近い魔女の肉体に、隠せない興奮で顔を上気させていた。

少年たちに囲まれたクラウゼアは、性的な危機感

で強い緊張を強いられる。

「な、何を……ハっ！」

何をされるのか、香りで解った。

少年たちが手にしているボウルには、白くて粘性のある液体「聖なる母乳」が湛えられている。

聖なる母乳とは、テリイボル神の祝福を受けた乳牛の乳から作られた、ヨーグルトだ。

本来なら祝い事にも使われるけれど、悪魔払いの場に於いては、聖水よりも悪魔を苦しめる効果があるという。

ボウルの白い液体は、一見するとヨーグルトに見える。しかし液体からは、クラウゼアが昨夜教えられた牡の性臭と、女性の愛液が混ざった和合液の匂いがしているのだ。

「こ、これは……っ！」

粘液からは魔法の力まで感じられて、この精液も自分が吞まされたポーシオンと同じ力で生かされている、と推察される。

「なぜ、このような物を――ハっ！」

疑問を感じて、すぐに推察できてしまった。

昨日の審問でクラウゼアの肉体は、グルーク王子の掌で淫液を塗られ、精液を性感として受け入れる肢体にされてしまっている。

この精液を、身体に塗られてしまったら――。

魔女の想像が、現実の物とされてゆく。

「魔女クラウゼアよ、これからお前の身体に聖なる母乳を塗り、その身を悪魔から清めましょう。お前が本心に悪魔と通じていなければ、母乳は真水となら変わりはありません。もし悪魔と通じているのなら、火のように熱い責め苦と感じる事だろう」

司祭の言葉に、強い焦燥で混乱する。

こんな精液を肌塗られてしまったら、肉体が強い性感に灼かれてしまい、肌と神経と子宮が異常なほどに、過敏にされてしまおうだろう。

しかも、昨日の破瓜によって一時的とはいえ魔力を消失してしまつて今、媚薬の力で性感を高められて肉体に精液を浴びせられてしまつたら、精液から性感を拾い上げ、精液から魔力を得てしまう、淫堕魔女に――。

性快楽に溺れ、やがて魔法も忘れ自我も失い、男性たちの肉遊具へと自ら墮ちてゆく、淫堕魔女。

そんな破滅へと、また一歩近づけられてしまう事は、確実だ。

「や、やめてくださいっ！ 私は本当に、悪魔と通じてなごつ――」

「始めなさい」

クラウゼアの言葉を遮るように、司祭が少年たちに命令を下す。

知らない男たちの精液が塗られてしまふ――。

「い、いやです……っ！」

逃れられない危機感で焦燥をして、魔女の鼓動がトクトクと高鳴つてしまふ。

恥ずかしそうに興奮を隠せない少年たちは、聖なる母乳と信じるボウルの液体を片手で掬い取ると、クラウゼアの肢体にトロリと塗り始めた。

一人の手が、ピキニに持ち上げられた爆乳を柔らかくなぞる。丸い乳肌の全面が、見知らぬ少年の掌と牡たちの精液で、触れられた。

――ぬりぬり。

粘液が垂らされた途端、乳房全体が強い性熱に包まれて、滑らかな肌がピリリつと性感灼きにされてしまふ。

「んうっ――このようになつ、無駄な……事をっ！」

(たつ、耐えなければ……っ！)

思わぬ艶声に少年は焦つたものの、すぐに司祭に命じられて、更なる肌愛撫を再開。

――ぬちゅり、とろりゅ……さワさワ……サわりスリリ、タぶるモみユリユる……

年頃のせいとか、緊張感と同時に恥ずかしさがあつたのだろう。

最初こそ遠慮がちな触り方だったけど、一旦女性の肌に触れたら、堰を切つたように大胆に、愛撫を始めた。

「ムネっ、いやですっ――おなか、そんなに撫でなひいっ！」

小さなピキニで先端部分だけが隠された露出乳房を、上から横から撫でられ揉み上げられて、柔らかい脂肪に指を食い込まれる。

少年の指の間から精液がこぼれ、糸を引きながら乳房に揉み込まれて、白い肌に塗り込まれて浸透させられてゆく。

繊細な肌が性粘液をタツプリと受けて、淫液の力で強い性感として、認識させられてしまふ。

精液による性感に燃える肌の熱で、粘液から牡の腐臭が立ち上る。

「くっ臭ひっ――おつ、おやめへ――ヤメてへっ――はあつ、あああつ！」

(に、匂いが……臭いの、身体が……っ！)

精液の匂いを嗅がされるとそれだけで、子宮が飢餓感を湧き起こされてしまふ。

「こほっ――こんなつ、においひっ！」

(ダメ……ちからが、抜けて……っ！)

淫堕魔女への入り口が開くように、女体が精液による性感で灼かれてゆく。

しかも今のクラウゼアは、忍者イヌワシの忍術で気を乱されている。

肉体が精液から魔力をどれほど得ても、その途端に体外へと発散、無力化させられてしまふのだ。

別の少年の少し堅い掌で、胸よりも子宮に近い箇所、引き締まった細い腹部を前後左右に撫で回されて、震える過敏な肌に精液を塗り込められてゆく。

肢体の各所を年下少年たちの掌で好き勝手にされ

ている。その危機感と羞恥感で全身が上気をして、肌が痺れて、より敏感にされてしまつてもいた。

「くふっ、あふっ――よこは、ダメですふっ――っ！」

脇腹をヌルつと精液で撫で上げられたら、心臓がトクンつと跳ねて、子宮の飢餓感が強く刺激をされてしまふ。

魅惑的な女体に触れ続ける少年たちも、次第に興奮の吐息がハッキリとしてきた。

「ああ……はあ、はあつ、はああ……っ！」

「こ、これが、女性の肌。こ、こんなに……っ！」

年齢的に最も女性に興味を抱く年頃なのに、戒律によって日常的に、禁欲生活に従事しているからだろうか。

液体を塗られた女体から立ち上る、牡精液の匂いは、全く気にならない様子だ。

むしろ、性を意識して始めて触れたであろう女肌の柔らかさや暖かさ、触れた女体の性的反応に、完全に捕らわれてしまつてい

る。もちろん、愛撫なんてした事も無いから、自分の欲求のままに、強く乱暴な肌愛撫だ。

しかし触れられるクラウゼアも、優しい愛撫なんてほぼ未経験。先日だつて、グルーク王子の好きなように弄ばれただけだ。

少年たちの素直で幼い欲求を向けられると、怖くて嫌悪感を否めないのに、無意識の母性本能が、どこか受け入れつつあるのも事実だつた。

精液まみれに濡れてヌルヌルの掌で、乳房を揉み上げられて、指を深く食い込まれる。

「お願い、ですふっ――もふっ、やめ……っ！」

揉み遊ばれる爆乳から、強くて小さな甘電がピリリつと流されて、心臓から脳神経と子宮までが、甘く強く貫かれる。

過敏な背筋を指先で撫で上げられると、上体から

手足の先にまで痺れが伝搬されてしまつて、肢体が
しなつて、より扇情的に女体を魅せた。

年下少年たちに愛撫責めをされる、極小黒皮ピキ
ニの拘束魔女に、民衆の興奮も高まつてゆく。

「なんか：すげえエロいぞ：っ！」

「ガキに聖乳塗られて、あんな悶えてやがる：っ！」
「やつぱり悪魔と通じて：くそうっ！」

罵りながらも、悪魔信者だという確信と、自分も
あの肌を味わつてみたいという素直な劣情を、隠さ
ない男性たち。

見上げている女性たちも。

「よくあんなに：恥ずかしいのかしら？」

「人前で、ねえ：っ！」

女を隠さないクラウゼアの姿に嫌悪感を示しなが
らも、その快感を計つて想像している様子だ。

（た、耐えなくては。でなければ、悪魔信者だと
思われて：っ！）

「みなさんが、見ていますううっ——どうか、や
めてへええええっ！」

爆乳を下から持ち上げられて、ピキニの裏地と乳
首が擦れ合はされると、豊かな脂肪全体を熱灼きに
されてしまう。

引き締まつた臍の下を指撫でされると、本能的な
危機感をお尻を引いてしまい、突き出したTバック
のヒップをツルんと撫で上げられてしまった。

爆乳もヒップも逃げ場など無く、ただ人前で、年
下の少年たちの掌で揉み遊ばれて、濃い精液を塗り
込められてゆく。

白濁を塗られた肌の全てが、粘液から強い性感を
拾う淫らな神経へと、塗り替えられてゆくのが止め
られない。

「はあああつ——つあああああつ——そんなにひい
いいつ——触れなはあああああああああつ！」

吐息は完全に湿つてしまい、拒絶の言葉も官能の

色香を隠せない。

愛撫を続ける少年たちも、修行の身分を示す純白
な貫頭衣の股間付近が、中から堅く押し上げられて
いた。

檀上に座するグルーク王子も、愛撫責めに身悶え
る魔女の恥態に、興奮とイヤらしいニヤニヤ顔を隠
さない。

肌撫で責めに身悶えるクラウゼアに、ギー司祭が
静かに問うた。

「クラウゼアよ。悪魔との繋がりを断つと約束する
か？」

もはや質問でもなく、悪魔信者を改心させる行為
そのものだ。

「わはうっ——わたくしわはあああつ——あくまどの
つながりひっ——なんてへっ——ムネっ、いやです
うううっ！」

断定に対する拒絶の言葉さえ、肌愛撫の強い官能
でトロけさせられてしまう。

聖乳による清めだと信じ切っている人々には、魔
女の姿は悪魔との姦交で淫らに墮ちた悪魔信者の身
悶えにしか、見えないだろう。

しかも、人々の方向から檀上に向かって風が吹い
ているから、偽聖乳の匂いがバレる事も無い。

それら全てを計算しているギー司祭は、冷静な狂
気の眼差しで納得をすると、少年たちに更なる聖乳
の清めを命じる。

「まだ神の御心が届かないようです。致し方ありま
せん、悪魔との繋がりが最も深い場所である局部に
まで、聖乳の清めを行いましよう」

「きよっ——っ！」

少年たちの、高濃度な精液に濡れる掌で、局部を
愛撫される。

人前でそんな事をされるなんて、恥ずかし過ぎて
絶対にイヤだ。

「いいつ、嫌ですふうううっ——つああああああ
あああああつ！」

拒絶したと同時に、興奮を隠せない少年の掌が、
拘束された魔女のピキニ内側へと潜り込んできた。

極小なトップ生地内部に潜り込まれると、すぐ
に小さな乳首を探り当てられて、指で摘まれて転が
される。

「つい痛いいいっ——はあああつ——ちっ、くびひ
いっ——こ、ころがさつ——なひでへえええっ！」

異性を知らない少年の指で乱暴に弄ばれると痛み
が走るのに、その奥には更に強くて小さな、性感の
痺れが感じられる。

少年の愛撫に邪魔だと判断されたのか、掌でピキ
ニがずらされ、魔女の右乳首がポロリと溢れ出た。

「見ろ、乳首だぞ！」

濃い桃色に上気した小さな乳輪は、興奮を示して
細かく粒立っている。

更に小さな乳首もその身を固くして、少年たちに
よる愛撫で性感を得ていると、広場の人々に証明し
てしまつていた。

「堅くしてやがるぜ！淫乱魔女め！」

少年の掌で乳房全体を揉み上げられて、硬化した
媚突を摘まれて転がされて、ツンと引かれる。

乳首にまで精液を塗り込められて、揉み遊ばれて
穢されて、より過敏な神経へと染められてゆく。

「あうっ——見ないっ——つあああああつ——お願い
ですふううっ——もふ、ムネっ——やめてへえっ！」

陽が傾き、東の空に星が煌めき始めると、檀上は
濡れた肌や大きなヒップ、豊かな乳房や小さな乳
首が、松明の炎に照らされて艶めく。

乳首転がして性感灼きにされるクラウゼアは、更
に大胆な箇所への愛撫で、羞恥の官能に強く肢体を
跳ねさせられる。

予期せぬ出来事



如月珠音
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



哀れな
不浄靈よ…!!

我々の前に
その姿を顕現せよ!!

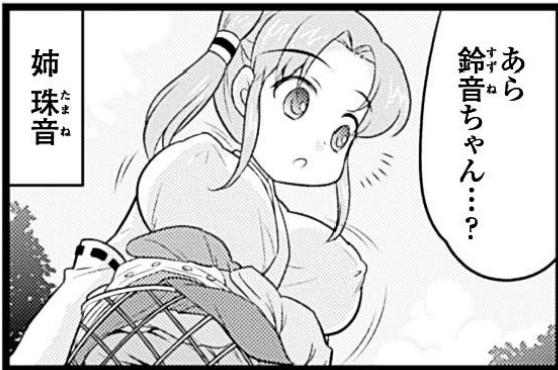


如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



チャレンジ! 鈴音!

姉
珠音



あら
鈴音ちゃん…?

分かる?



随分重そうね…

さすが珠姉ユ…



真中
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



貴方は一体
誰なの…!?

正体を
現しなさい!!

ウウ…



んーでも
そのくらいの靈なら
私じゃなくても
破えそうよね☆

そうだ!
今回は鈴音ちゃんが
やってみよー♡

は?



オウ!!
ここはどこデースか!?

が…外人さん!?

why?



反魂の術なんて私
学んでもいないじゃない!!

ホウワ?

私もついでだから
だいじょーぶ♡

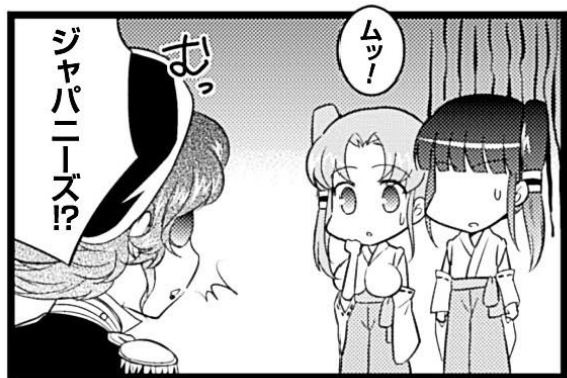
祝砲という名の砲撃



また
鎖国してるとは…!!

オノレ! 条約をやっと
結んで開国したのに…!!

鎖国シナイデー…



ジャパニーズ?!

ムッ!



真守
真中の姉。海外からやってきた謎
多き女性。催眠術を使う。



見て分らないか?
空砲ダ!!

アンタ一体
何なのよ!?



は?
サコウ?

そのカッコウ!?
もしやまた鎖国して
いるのデスネ!?

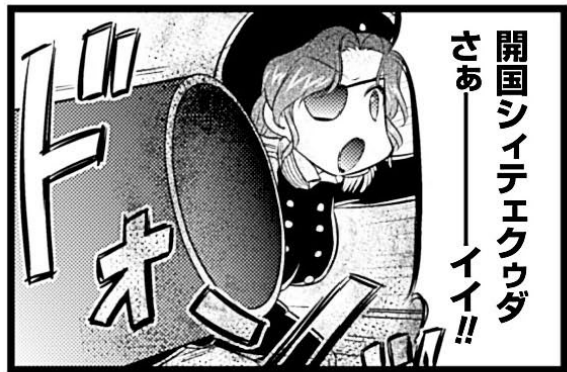


死神
如月神社に居候する死神。極度の
対人恐怖症。



え…だって
どうみてもこの人…

あなたはまさか…
マシユ・ペリーさん?



開国シイテエクウダ
さあ——イイ!!



何で女なんだー!?

いかにも…!
我の名はペリー!!



どうやら
昔の時代の軍官みたいね

なっ!? 一体なんなの!?
コイツ!

夏だ！
ビーチだ！

水着回だ

夏の海での定番コス
もちろん…コレ!!

あお

!!?
!?

何故！
ビーチで！
競泳水着を!!!

いや…水泳部で
使ってるやつを…

ドレスコードと
言うものが
あるだろう
ミコト！

夏の海と言えば
三つの小さい
三角でしょ!!

自分はこれは
これで…

しん えん せん たい
深淵戦隊
ポトコルゴロ
~海山羊はめめる下半身で丸呑み~
うみやぎ かはんしん まるの

競泳水着も好きですけどね!

漫画 **からすま式**
comic

ほら黄色も
出す!

これで、
新ひのを、
買って来い。





着けて…
くれないんだ…



あ…指輪…

大体ビキニなんて
記録出ないじゃないっ



まったく
勝手なんだからっ！
あんな大人に
なっちゃダメよ！

お目付け役にされた



ちゅっ…
やらしすぎじゃない？



これ試着して
みようかな

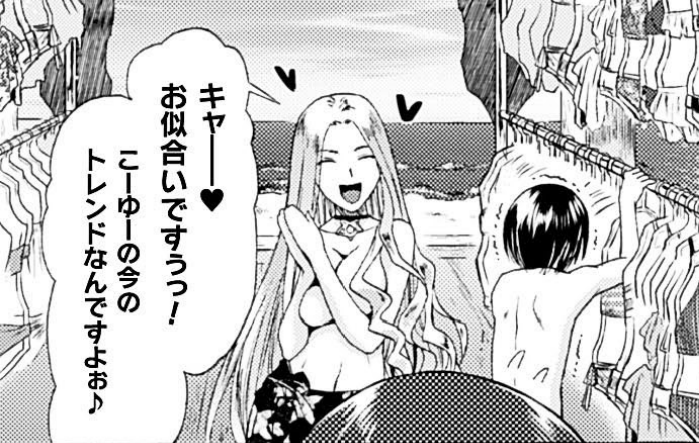
ハカセも何か
一着選んでよ

……



「こっ
これいいん
じやナイ!!」

ねえハカセ…
こ…これ…



キヤ〜♥
お似合いですわっ
このおのの
アハハななですわっ



はなち
ころこ
※心の鼻血



キラッ

わたし
みたいに♥



ほ…ホント
ですかあ……？

これでオスどもは
体の…じゃなかつた
目の色変えて
即交接よお♥

そお……



ミコトッ
このおばさん
変だよっ
おばさんが
髪よけたらねえっ

コナコナ



おばっ
……!?



おおばさん
…露出狂？



プラントクトン臭い
稚仔があああ!!

ウ...の

危ないっ!!

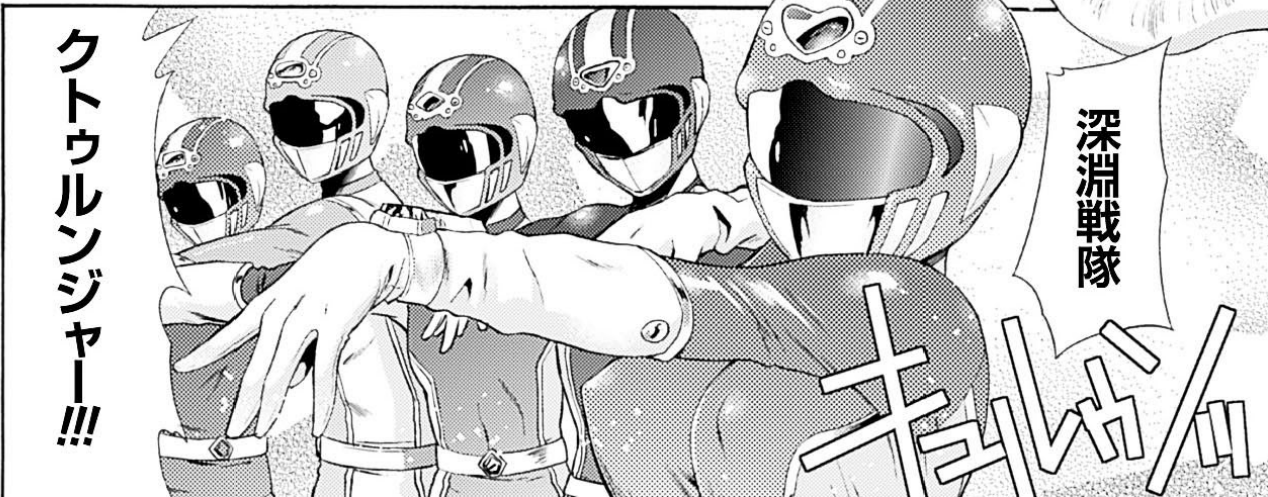


テケリ・リ
チェンジ!!



ミコトっ今の
緊急シグナルは：
なッ!?

みんなっ
装着よ!



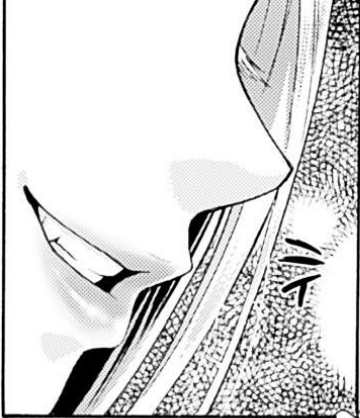
クトゥルンジャー!!!

深淵戦隊

キルッ



旦那が世話に
なったわね





アビスム・
ステイングス!!



きゃああっ!!

何百もの吸盤が喰らいついてるのよ逃げるなんてムウリッ

快樂の深海に沈めてあげるわ♡

放…っ!



んっっっ!?



変なトコ… 触らなっ…! やあああっ!!

ハイッ



たあっぶり 気持ちよくしてあげるから…

身動き一ツ 取れないまま…

ハイッ



人間のスポーツに
天使の力を
持ち込むのは
フェアじゃない

知らない
わよ!

あはは!
あいつらまた
揉めてる~

チームワークが
壊滅的すぎるのみ...

個々の能力は
文句ナシだけど
こりゃ一回戦も
勝てないかもな

なにせ
相手チームが...

いきますよ
勝江先生!
大間先生!

1!

21!!

前号までのあらすじ

コリスの刺客・黒猫に操られた睦月と、彼の手で囮られるエンジユ。二人はマ
キナとルシアの協力で救出されるが、黒猫は逃亡するのだった。

おれんじ！！

存在自体が
反則だろ
大魔神は

アレだもん
なあ

大間真先生は
恵殿学園の
体育教諭

気さくで親しみ
やすいのに
大きすぎる
身長が原因で

大魔神なんていう
あだ名がついて
しまっている

そこにクラス担任の
勝江先生が組んだ
「先生チーム」が
僕たちの一回戦
相手なんだ！



ス...

もともと
怪我なんて
なかったわ



そう



ミスCに
受けた傷は
平気？

……黒猫は
つぶすわよ



黒猫が睦月の
近くにいるのは
確認済み

ミスCは現在
黒猫は現在
査問検討中

次はあたしが
反撃する番よ

危険であっても
わたしが助ける
義務はない

……ただし



交戦は
勧められない

—フン

人間が
えらそうに



あなたの
勝率は2%以下

彼女にはまだ
いくつかの
奥の手がある



分かっているのよ

黒猫がどこに
いるかくらい



ううん平気



沙耶
だいじょぶ？

具合悪いなら
保健室にいた
ほうが...

はあ...

ああん!?
睦月なんだ
これは!?

ちよっ...
僕の生徒手帳
勝手に見ない
でよ

落ちてたのを
俺が拾って
やったんだよ!

俺だけに
ゆるされた
特等席に
地遊尼が!

睦月を
寝取られたあー!

林則

女の子と
二人っきりって
初めてだったから
つい...

なにこれ
スルいー!

ボクも
睦月クンと
撮りたい!

しく...
しく...

あのときの
持って帰って
たの!?

ふぎけんじゃ
ないわよ!

わあ

わあ

いますぐ
剥がしなさいよ!

私がやるわ!

や...やめてよ
エンジン!

他のも
いっしょに
剥がれちゃうよ!

わー

わ

130

.....

闇に墮ちた親友を説得するため、
イセリアの姫が選んだ方法とは
!?

イセリア 英雄戦記

the legend of the Acerpa war

第38話 とある錬金術師の末路

よ しろ う
小説 夜 士 郎
NOVEL

ぼ た ん
挿 絵 牡 丹
ILLUSTRATION



壊されると、フィオナは思った。
「ツクウ……！ フィオナ、フィオナ
っ……ああ、お前のオマンコは、なん
てっ……最高なんだっ」

柔らかく大きな尻肉に取りすがり、
魔力によって生成された偽ペニスで、
セリーヌはががつとフィオナの陰唇
を穿つ。その激しさに、あわいから飛
び散る愛液は、泡立ってすらいた。

「ひいっ、ひいっ……！ もう、や
めっ……正気に戻って、セリーヌっ」
何度、彼女の精液を子宮に注がれた
だろうか。フィオナの切なる呼びかけは、
魂の擦り切れるような悦鳴である。

「ああ、こんなにもわたくしの身体で
媚薬の混じった親友の精液が、脳髓
までを汚染して——心と身体は忌避よ
りも歡喜に燃え上がってしまう。」

ああ、こんなにもわたくしの身体で
愉しんでくれているんだ。

わたくしの使い込まれた牝孔でズボ
ズボして、気持ちいいと喘いでいるんだ。
今までわたくしの身体を味わってく
れた男の人たちもそうだった。彼らが
この身を貪り快感に喘ぐ度、とろける
ような恍惚を感じたものだ。

「セリーヌっ……！ もっと、もっと
……ふああっ」

もっと。もっと、悦んで欲しい。
皇女ではない、わたくしという肉
を責め苛んで——。

じゅぼっ、ぐじゅぼ！
ずぶじゅぶ、ぐじゅぶずぶっ！
「フィオナああ！ う、くうっっ！」

顔をしかめ乳房を揺らし、聖女の肉
孔の締めつけに、戦慄き震える可愛い
セリーヌ。ああけれど、それだけでは
ないでしょう？ あなたはもっと、気
持ちよくなれるでしょう？

例えばその乳房で。石畳に涎を垂ら
している、オマンコで——。
「ばちばちばちっ！」

突如、魔剣クラウソラスによって作
られていた瘴気結界が切り裂かれた。
何か、光り輝く刃のようなものが、
暗黒の壁面を貫通しているのだ。ここ
ら側へ姿を現すその刀身が、ずぶずぶ
と下方へ流れ——。

「断絶された空間との同調を開始。魔
力によるフィールドの破壊を開始」
フィオナのあわいがごとく、強引に
広げられていく裂け目から姿を現した
のは——小さな天使であった。

手のひらほどの天使の、その背中に
輝く三対六枚の羽に見覚えがある。
「ル……ルシィ、フ……」
天使の瞳がこちらを映して、その輝
きがいつそうに増す。

ぱりいんっ、と結界が割れた。
そして妖精は光の刃を突きつけて、
セリーヌへと果敢に襲いかかるのだ。
「——ッ！ クラウソラスッ！」

呼びかけに闇の刃が応えた。
セリーヌの突き出した右手にクラウ
ソラスが滑り込む。闇に染まった髪を
数本引きちぎられながら、セリーヌは
光刃をかわし剣を振るう。

ルシィフはその攻撃をひらりとかわ
してセリーヌの眼前へ辿り着く。
「カッ！ と——その身体を、瞳を灼
くほどに発光させたのである。」

「ぬ、ぐああっっ！」
目を眩まされたセリーヌがわずか
棒立ちになる。
「おのれっ……！ 私とフィオナの逢
瀬を、邪魔するかって……！」

「ああ」
——鋼の軋むような声はセリーヌの
頭上から。
飛来する、一閃。
刹那、湯浴み場の水面に波紋が立つ
ほどの、凄まじい金打音が響き渡る。

セリーヌが、頭上に掲げるクラウソ
ラス——それと火花を散らして食らい
あうのは、これも闇夜が如き黒色の大剣
その名もアロンダイトである。
すなわち。

「貴様っ……、ウォル、ガードッ」
「応よ、久しいな、セリーヌッ」
金髪を猛々しくも逆立てた巨軀の一
撃は、闇の力に目覚めたセリーヌにし
て片膝をつかせるほどであった。

「ぬうっ……ぐああっっ！」
彼女は呻きながらも剣ごとくウォルガ
ードを跳ね上げて、距離を取る。
セリーヌのペニスが消失し、闇鎧が
股間を再び覆い尽くす。そして彼女は
刃が人の形を取ったような凶悪そのも
の男を見やり瞳を細めた。

「何だ貴様。随分と変わったな」
ウォルガードの肉体から突き出す刃

じみた隆起は鎧の装飾ではない。その
胸の内に埋め込まれた魔宝具の律動も、
セリーヌには見えるのだろうか。
「魔物か人か、まるでわからん。……
貴様は魔王様の敵なのか？」

「敵だ」
間髪入れずにウォルガードは答えた。
「バーンドベルグは俺様の国よ。魔王
如きが尻を置くなど増長も甚だしい。
ゆえに、俺様が殺してやる」

——轟、と。黒髪を翻し、セリーヌ
が昏い闘気を進らせる。
「……魔王様を殺すと言ったか」
「ああ、それがどうした」
魔王のそれと遜色ないのではないか。
それほどの魔気を前にして、けれど闇
の王子に怯えはない。

吊り上がる口の端から覗く犬歯、確
かな愉悅に輝くその顔は、獲物を前に
した肉食獣じみて——猛つているのだ。
「クハッ。来るがよいセリーヌ」
ウォルガードが腰溜めに、アロンダ
イトを構える。

それを前にしてセリーヌは、すつと
クラウソラスを彼へ向け——。
「——インペリアルダイブ」

「……」
刹那、その体軀は彗星と化した。
石畳にクレーターを穿つほどの勢い
で、闇の騎士が射出される。水平方向
のインペリアルダイブによって梳られ
ていく石造りの地面、移動にともない
弾き出される空気が、

「きやあっっ！」

フィオナの体軀を突き放す。
様子見も何も無い、初っばなから繰り出されたセリーヌの必殺技。

——それを。

「ぬうおあっ！」

獅子吼とともに雑音放つアロンダイトが、受け止めていた。

セリーヌの瞳が驚きに見開かれる。

ウォルガードの背後に衝撃の波が通り抜け、湯浴み場の壁やその向こうの木々をすらなぎ倒していく。それほど威力を身体ひとつで支えながら、彼はニイ、と笑みを浮かべた。

刃の接地面を支点にしてウォルガードは身体を反転。インペリアルダイブの突進方向を、地面へと誘導する。

「くっ!!」セリーヌの体軀が石畳へと叩きつけられて、碎かれる床材が周囲へと、礫と化して弾け飛ぶ。

「があっ！」

半ば床に埋もれたセリーヌへ大上段から振り下ろされるアロンダイト。けれどセリーヌはそれを避けもせず、むしろ前へと飛び出して剣の根本を肩口の装甲で受け止めた。

——トン。と。クラウソラスの柄頭がウォルガードの胸を叩き。

「ぬ……うおおっ！」

それだけで彼の体軀は十メートル近く弾き飛ばされたのだ。

間髪を入れずにその懐へ跳び込んで横薙ぎに振られるセリーヌの刃。それを受け止めウォルガードは、返礼のごとく剣を叩き込む。

「くあっ!」「はああっ!」

一合、二合、三合と。

フィオナの頬にびりびりと衝撃を伝播させながら、食らいあうふたつの魔剣自在に泳ぐ両の腕、目まぐるしい脚捌きは一流の剣士にあつて淀みなく。

——まるで、ワルツを踊っているようだ。

そんなことを、フィオナは思った。

「う、うう……」

と、彼女の手の中で、小さな呻き。

「ル、ルシイフッ! ああ、だ、大丈夫なのですかっ」

ウォルガードが現れると同時に、力を使い果たした彼はふらふらと手の中へ落ちてきたのだ。

「だ……だじようぶ、だから……」

「か、回復の魔法をつ」

「……おっばい」

「……………はい?」

「フィ、フィオナのおっばいに……包んでくれれば、回復、するから……」

「え、ええと……その」

こうですか——と、姫君は素直に、彼を胸の谷間に挟んでしまう。

「あふうう……」

まるで湯船に浸かったように、妖精は幸せそうな溜息を漏らすのだ。

「ルシイフ……どうして、ここに?」

「お姉ちゃんのおっばいを覗きに……ああいや」

と、彼はキリッと舐を直し、「闇の力を感知して、何があつたのかと駆けつけたんだ」

「ぞ、どうですか……」

まあ、深くは追求しましい。

「んで、あの人はなんか、山の中で剣を振つてた」

と、ルシイフがウォルガードを指さして言う。近場にいた彼も、異常を察知して駆けつけたことだろう。

「みんなは、作戦会議をしているよ」

「そう……ですか」

セリーヌを説得したい。たとえ一対一でもと、そう、皆には告げていた。

それを受けての作戦会議だろうか。今この場にセリーヌが現れたのは、あるいはチャンスなかもしれない。

セリーヌを、抑えられればだが。

「ぬう! ぐうっ! セリーヌ……」

——ウォルガードは押されていた。

「それ、それ!! ハハハハ!」

その巨軀が、改造されてなお禍々しく変貌した獣の王子。けれど彼をして、一撃の度に後退し、たたらを踏んでいる。

それほどに、闇に落ちたセリーヌの力は強いのか。

「……わ、わたくし、も……んっ」

精霊装甲へ駆け寄ろうとして、腔肉が疼き、甘い声を漏らす。

とろり……と、そのあわいから腔内出された白濁が溢れてきた。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「は、はい……ん、くっ……」

装甲を肌当てる度、発情した身体に甘い媚熱が駆け抜けた。

手中から、光の弓が上下に伸びる。それをセリーヌへ向け、弦を引き絞ると、

輝く矢が姿を現す。

「はっ、はあっ……は、あっ……」

湧き上がる肉の疼きに手が震える。媚毒精液に、子宮が煮込まれている。

果たしてこんな身体で、彼女を射止めることなどできるのだろうか。

(大丈夫?……やってみせますっ)

いや、やるのだ。今こそ、親友である彼女を取り戻す好機なのだから。

「どうした、闇王子っ! 獅子とすら呼ばれた貴様がこの程度かっ」

「ぬっ、ぐ、くうっ!」

剣戟のうちに、何かの割れる音が混じる。

みし、びし……とウォルガードの身体から聞こえてくる。

——壊れている、のか。

「ヨワキモノは、失せろっ……」

「——っ」

セリーヌが嘲笑とともに吐き溢したその言葉が、彼の何かを突き刺した。

その体軀から響く、みしりびしりと何かが壊れていく音は途絶えない。

否、それはさらに激しく、強く。

「俺様をつ……このウォルガードをつ、舐めるなあああああああ!」

闇の戦士は己の身体を破碎しながら、過剰なまでの力を吐き出すのだ。

「……なっ」

血を吐くような獅子吼とともに雑音放つアロンダイトが、受け止めようとしたセリーヌの剣を弾き上げた。

がら空きの胴体へ、破碎槌の如き前蹴りが突き刺さる。

「がっ……！」
刹那、動きを止めたセリーヌの、その横腹へ。

「サンクチュアル・アローツ！」
——フィオナの放った光の矢が突き刺さった。

「なっ！ フィオナっ、お前っ……！」
目を見張るセリーヌが膝をつく。光の矢は消失して、けれどその腹腔に傷はない。それなのに、彼女の身体には力が入らないようだ。

「イセリアの姫……貴様、勝負の邪魔をするかっ……！」

その目の前にいるウォルガードも吐き出す悪態と裏腹に、満足に身体を動かせない様子だ。

「ごめんさいっ、ウォルガード様」
てくてくと彼の前へ歩み寄り、ぺこりと頭を下げる。

「そ、その……。この非礼はいずれお詫びをしますからっ。お、お金とかはないですけど……あのあののっ、わたくしの身体なんかで、よければっ」

豊かな胸元で拳を握り、汗を飛ばして訴えるフィオナから、王子は鬱陶しげに目を逸らす。そうして毒気を抜かれたように、ひとつ、息を吐いた。

「ち、……。イセリアの姫君の身体、かふん。まあ、いいだろう。貸した」

「と、とにかく今は、セリーヌをっ」
セリーヌへ、向き直る。彼女は悔しげにこちらを睨みつけていた。

「くっ……。身体が、動かない。何をした、フィオナ」

サンクチュアル・アローによって流し込んだ破邪の力。それが今彼女の内部で、魔王の力と闘きあい、その動きを阻害しているのだ。

だがそれも一時的なものにすぎない。「……セリーヌ。あなたは本当に、イセリアの誇りを失ったのですか？」

彼女には、黒髪も黒い鎧もまるで似合っていない。セリーヌに似合うのは、輝くロイヤルブルーの髪と白銀の、イセリアの甲冑だ。

「……フィオナ。お前は、魔王様の素暗らしさを知らないんだ」
セリーヌの表情が、恍惚と輝く。

「あの人を前にすればわかる。女というものは……魔王様に傳くために、産まれたにすぎないと。なあフィオナ」

「お前だってわかつているだろう。女の悦びに比べれば——誇りなんて」
その視線は幾度も辱められたあげくに肉付きを増して熟れていく、フィオナの肉体を這い回る。彼女にいやらしく見られる、ただそれだけで、甘い疼きが姫君の身体に広がっていく。

「……あなたの言う、通りなのかも……しれない」
人としての理性など、快楽を前にしては砂上の楼閣にすぎないことをフィオナは誰よりもよく知っている。ああ、この身こそ浅ましく悦を貪り、豚が如く尻を振ったものだ。

「それでも、この穢れきった身に、ついてきてくれる者たちがいるのだから。」

「わたくしは……イセリアの姫だから。快楽になんて……負けれない」

キツと尻を押し、セリーヌに顔を近づけて。その唇に——キスをした。

「んっ……!? ちゅ、くちゅ……！ な、何を、フィオナっ」
「あなたを正気に戻してみせますっ」
彼女の頬に手を添えて、その口腔へ舌を潜り込ませる。混じりあう、唾液と唾液。親友の味が口中に染み渡る。セリーヌを救うのだ。わたくしの身体で。自由の剣の彼らは言っていた。ともに戦う我らは家族も同然だと。その絆を、同じく彼らに教授された「裸の付きあい」で取り戻すのだ。

「ちゅ、ば……。はあっ……。さ、さつきは、セリーヌに、されたからっ……」

「今度は、わたくしのばんっ」
可憐な姫君の手のひらが、大きく開いたセリーヌの胸元へ潜り込む。その柔らかく、それでいて張りたつぷりの乳房に手のひらを沈めて、ほぐすように、むにゅ、むにゅりと揉み上げる。とたん、女騎士の全身に鳥肌が立った。

「んっ……！ ふあ、くあっ……」
甘い声が、その喉から漏れる。フィオナの指先が捉える乳首はすでに凝り立っていて、それをくりつと摘み取ると、「ああっ」と甲高い声とともにセリーヌは背を反らした。

「わたくしのおっぱい、とつても、えつちになっちゃうたけど……あなたのおっぱいも、えつちなのですね」

もしかしたら感度のほうは、フィオナよりも上かもしれない。
朱を浮かべるセリーヌの頬は、姫君がむにゅむにゅと牝乳を揉むほどに柔らかくどろけていくのだ。

「は、離せっ……フィオナっ」
「だめですっ。いっぱい、いっぱい、気持ちよくしてあげる……魔王なんかよりも、いっぱいですっ」
湧き上がるのは奉仕心だ。セリーヌの肉棒を愛撫していた時も感じた、姫君に相応しからぬ牝犬奉仕の渴望が、少女の身体を突き動かす。

「ん、ひいっ……」
「すごい、熱い……」
そこはしどろに濡れそぼち、火傷しそうなくらいに熱を高めていた。

「……ねえセリーヌ。わたくしをズボズボしていた時もオマンコはあったの？」
ふと、気になっていたことを聞く。

「……あ、あった、けどっ」
「そう。じゃあ、とつても切なかったのでしょうね。セリーヌ。わたくしのオマンコをゴツゴツ責めながら、でも自分のオマンコは触れられなくて——」

「……そ、そこはっ、ふあアッ!!」
反論しようとした閼騎士の、その細腰が戦慄した。姫君の人差し指と中指とが、その濡れた肉花へにゆるるるっ

「……そ、そこはっ、ふあアッ!!」

と潜り込んだのである。

「セリーヌ……あなたもいっばい、犯されたのですね」

肉のヒダは柔らかく指先に絡みつくように、それは男の肉棒を悦ばせることを覚えたオマンコの蠢きた。

指先をくの字に曲げて、おへそ側をこしこしと掻いてみると、

「ら、め、そこはっ、魔王様のためのっ……あ、ひ、んひいっ」

黒く染まった長髪を、ゆるゆると揺さぶって女騎士は懊悩するのだ。

「このあたり、コリコリしてますね」指の第二関節が潜ったくらいのおへそ側が硬くなっていた。

まるで男根のような反応だ。フィオナの中にも、それがある。その硬くなったところを刺激されると、天まで突き抜けるような快悦に襲われるのだ。特にそこを、硬いペニスで小突かれた時なんてたまらない。

くちゅ……くちゅ。こりこし、くりりっ。

「んんっ、はううっ！ そ、そこはっ……だめ、だめ、はううっ……」

膣壁の弱みを責められて、露出たつぶりの闇鎧が震え上がる。前屈みになっていく彼女の肉孔から手指を一度引き抜いて、その背後へ回り込んだ。

前の支えをなくして、セリーヌがまるで犬のように石畳に四つん這いとなる。ひくっ、ひくっ、掲げられる尻が震えている。

股ぐらの布地をぐいと掻き分けると

そこには、愛液を滴らせて柔らかくふやけた肉孔が聖女の指を欲しがるように桃色とは口を開いていて、綺麗に皺の寄りあう肛門がまるで魚が呼吸するように開閉していた。

「すごい。セリーヌのあな、どっちもすごい、いやらしい……」

ひくひく震えて、真っ赤に染まって、なんて愛らしいのだろう。

ああ……気持ちよくしてあげたい。右手の二指を、ヴァギナへ押し込む。左手の二指を、アヌスへ押し込む。

「んくおおおっ!!」

かくんっ、とセリーヌの顎が跳ね上がって、ヒップがぶりんと揺れた。

そのままフィオナは、右手と左手の指を肉壁こしに擦りあわせてみた。

「あひいひい！ にゃ、にゃに、これっ！ ひ、くひいあうううっ!!」

その途端闇騎士は瞳を見開いて、全身をカクカクと震わせたのだ。

「どう、セリーヌ？ こういうのも、いいでしょう？」

二本指の大きさにヴァギナとアヌスを拡張し、指先を鉤状にひん曲げて、互いに内部を掻き回す。

「な、なんだ、こんなっ、ん、ふあうううっ！ おひり、おまんこおっ」

そうやって責めながら、広がりを充血する膣門をれるりれりりと舐めてやる。

「んおっ！ ふおおんっ!! あ、あたま、ゾクゾクううっ」

闇少女の背中にぶあつと鳥肌が吹き出した。しなやかな太腿に腿が浮いた。

くちゅっ、くちゅっ、くちゅぶちゅり。愛液と腸液とを指先に絡ませながら、反応してくれるそれぞれの肉ヒダを愛おしく掻き回す。

「はへえっ……んへえっ！ しゅご、こ、こんな、にいっ……!!」

「れるれる……れるじゅっ!!」

皺孔の一枚一枚を丁寧に、舐める。イセリアの姫君にはあり得ないだろう、下品なご奉仕だ。こんなことまで覚えさせられてしまったのだ。

「ひいこーモンっ！ コーモン、なめるのっ……ふあだめええっ」

「んっ……気持ちいいですか、セリーヌ？ ふふ……」

マンコを犯す指は腫れあがるGスポットや襲肉の隙間をなで回し、糞孔に突っ込んだ指は括約筋を愛撫しながら子宮を裏からツンツンつつく。

うねり、くねる幼馴染みの肢体。豊尻を左右に揺らして騎士の身体は、姫君の熱心な指奉仕に反応していく。

「どうです？ 魔王様があなたに、こんなことをしてくれませんか？」

「な、何を不遜なっ……わ、わたしが……魔王様に、して、あげりゅんだからっ……んひっ、くひいひいっ」

甘い声でセリーヌは吸り泣く。いやいやと頭を振って、乳房を石畳に押しつけながら、くひいと豊満な尻を吊り上げていく。

その細腰が小刻みな痙攣を始めて。

「ああ、んひいっ……い、ク……イクううっ……!!」

肢体がぎゅうっと強張った。フィオナの指を、折れんばかりに噛み締める。墮天装甲から露出する生肌が赤らんで、玉粒の汗が吹き出していた。

「フフ。イッてしまいましたね。気持ちよかったですか？」

「は、う、う……。こ、このていどで、私を籠絡できるとおもうなあ……」

アクメの余韻にとろけながら、けれどセリーヌの、瞳の敵意は消えていない。

「むう。しぶといですね」 どうやらご奉仕エッチのアクメでも、彼女の忠誠は溶けきれない様子。と。

「フン。そんなものでは駄目だ」 座り込みふたりの淫らな姿を鑑賞していたウルガードがせせら笑う。

動ける程度には回復したのか、彼はセリーヌの目前に立つと、股間部分を覆う鎧を引き剥がした。

「騎士であるこいつは、まず剣にて負かさなければならぬのだ」

刹那、セリーヌの眼前に、異様な肉根がそそり立つ。

「な……あ」

それを目にした女騎士の声色は、けれど期待に上擦っていた。

黒光りする肉幹は、大人の腕ほどもある太さを誇り、その表面にはまるで太い縄を這わしたような血管が、螺旋を描いて取り巻いているのだ。拳のように膨らんだ亀頭肉、その先端は槍の穂のように尖りきり、それはまさしく子宮を扶けるための凶器であった。

「まったく、吸血鬼の奴めが。これも



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>